

東山61号窯発掘調査報告書

名古屋大学図書



11904376

2010年

名古屋大学大学院文学研究科考古学研究室

正誤表

ページ	誤		正
i	2005年11月10日から	→	2003年11月10日から
46	2005年11月10日～2005年12月12日	→	2003年11月10日～2003年12月12日

例 言

1. 本書は、愛知県名古屋市千種区園山町三丁目（名古屋大学構内）に所在する東山（略号H）61号窯の発掘調査報告書である。
2. 調査は、名古屋大学理系中華食堂・理系カフェテリア（現FOREST）の改築・拡張工事に伴い、遺跡の範囲を確認することを目的として、2005年11月10日から同年12月12日にかけて、名古屋大学大学院文学研究科考古学研究室が実施した。
3. 調査体制は、以下の通りである（所属は調査当時）。

調査担当 山本直人（名古屋大学大学院文学研究科 教授）

梶原義実（名古屋大学大学院文学研究科 講師）

伊藤伸幸（名古屋大学大学院文学研究科 助手）

調査員 岡田 賢（名古屋大学大学院文学研究科 博士後期課程）

高林 詠（名古屋大学大学院文学研究科 博士前期課程）

調査参加者 榎本真希 住田明日香 百瀬充輝 仙石健雄 林亜沙美

（以上、名古屋大学文学部）

調査指導 尾野善裕（京都国立博物館学芸課 主任研究員）

4. 出土遺物の基礎的整理作業（水洗・注記・接合）は、名古屋大学大学院文学研究科考古学研究室の学生が行った。
5. 本書は、尾野善裕（京都国立博物館学芸部 工芸室長）・梶原義実（名古屋大学大学院文学研究科 講師）・三岡由佳（名古屋大学大学院文学研究科 博士前期課程）・山本直人（名古屋大学大学院文学研究科 教授）が執筆し、尾野が編集した。執筆分担については、目次と各文末に示した。
6. 本書で用いた標高は、N. P.（名古屋港工専用基本海水準面）、北方位は国土座標第Ⅶ系による座標北である。
7. 出土遺物の整理作業にあたり、次記の方々から格別のご協力を賜った。記して感謝の意を表す。

平尾政幸（京都市埋蔵文化財研究所 統括主任）

佐藤 隆（大阪市文化財協会 事業担当係長）

森 泰通（豊田市教育委員会文化財課 副主幹）

水橋公恵（三重県埋蔵文化財センター 技師）

8. 調査記録および出土遺物は、名古屋大学大学院文学研究科考古学研究室で保管している。

本文目次

I	遺跡の所在位置と環境	(梶原)	1
	1 地理的環境		1
	2 歴史的環境		2
II	調査に至る経緯と調査経過	(梶原)	4
	1 発掘調査に至る経緯		4
	2 調査経過		4
III	1 トレンチの調査		7
	1 基本層序	(梶原)	7
	2 出土遺物	(尾野)	8
IV	2 トレンチの調査		11
	1 基本層序	(梶原)	11
	2 出土遺物	(尾野)	11
V	3 トレンチの調査		15
	1 基本層序	(梶原)	15
	2 出土遺物	(尾野)	16
VI	4 トレンチの調査		18
	1 基本層序	(梶原)	18
	2 出土遺物	(尾野)	19
VII	考察 —H-61号窯の調査をめぐる諸問題—	(尾野)	34
付編	東山114号窯出土木炭の炭素14年代測定	(三岡・山本)	44

挿 図 目 次

第1図	調査地点位置図	1
第2図	調査地点周辺遺跡分布図	3
第3図	調査区設定図	5
第4図	1トレンチ土層断面図	7
第5図	1トレンチ出土遺物実測図	9
第6図	2トレンチ土層断面図	11
第7図	2トレンチ出土遺物実測図(1)	13
第8図	2トレンチ出土遺物実測図(2)	14
第9図	3トレンチ土層断面図	15
第10図	3トレンチ出土遺物実測図	17
第11図	4トレンチ土層断面図	18
第12図	4トレンチ出土遺物実測図(1) 下層灰層	21
第13図	4トレンチ出土遺物実測図(2) 間層	22
第14図	4トレンチ出土遺物実測図(3) 上層灰層	23
第15図	4トレンチ出土遺物実測図(4) 上層灰層	24
第16図	4トレンチ出土遺物実測図(5) 表土・整地土層	26
第17図	4トレンチ出土遺物実測図(6) 表土・整地土層	27
第18図	H-61号窯出土品比較図(S=1:4)	35
第19図	推定H-61B号窯焼成品・H-44号窯出土品比較図(S=1:4)	37
第20図	高蔵遺跡第4次調査SD06出土須恵器実測図(S=1:4)	40
第21図	稻荷山古墳出土猿投窯系須恵器有蓋脚付短頸壺(S=1:4)	41

表 目 次

第1表	実測図掲載遺物一覧表	28
-----	------------	----

写真図版目次

- 図版 1 遺跡 1 調査地全景（南より）
2 東区伐開後状況
- 図版 2 遺跡 1 1 トレンチ完掘状況（西より）
2 2 トレンチ完掘状況（南より）
- 図版 3 遺跡 1 3 トレンチ完掘状況（南より）
2 3 トレンチ灰層堆積状況
- 図版 4 遺跡 1 4 トレンチ灰層上面（西より）
2 4 トレンチ完掘遠景（南より）
- 図版 5 遺跡 1 4 トレンチ西端部灰層断面
2 4 トレンチ中央部灰層断面
- 図版 6 遺跡 1 4 トレンチ灰層南端
2 東区完掘状況（南より）
- 図版 7 遺物（1）
- 図版 8 遺物（2）
- 図版 9 遺物（3）
- 図版10 遺物（4）
- 図版11 遺物（5）
- 図版12 遺物（6）
- 図版13 遺物（7）
- 図版14 遺物（8）
- 図版15 遺物（9）
- 図版16 遺物（10）
- 図版17 遺物（11）

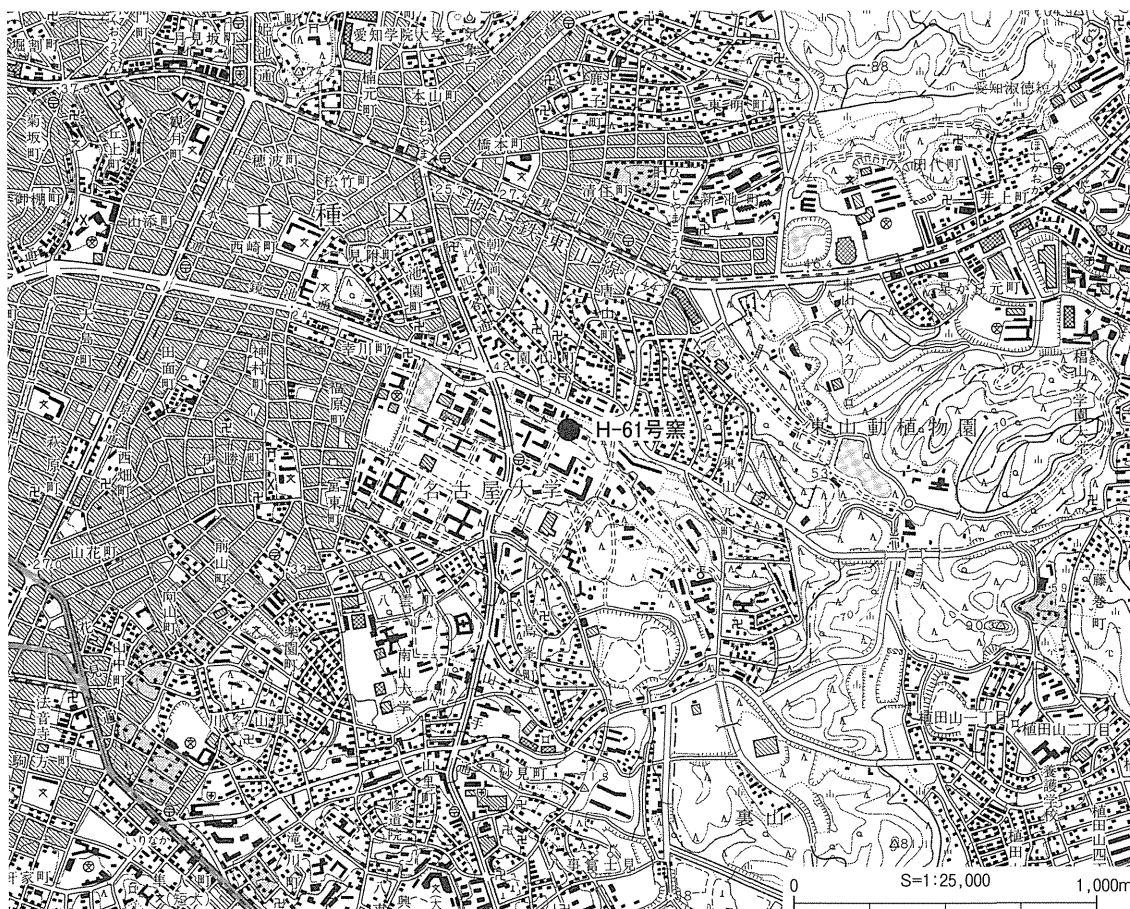
I 遺跡の所在位置と環境

1 地理的環境

東山61号窯（以下、H-61号窯）は、愛知県名古屋市千種区園山町名古屋大学構内に所在する（第1図）。遺跡の所在する名古屋市東部丘陵は、名古屋市千種区・名東区から長久手町、日進市にわたって広がる、標高約40m～100m程度の起伏に富んだ丘陵地帯である。遺跡は名古屋市東部丘陵の西端にあたる東山丘陵から、さらに北西方向に張り出した尾根筋の南西側斜面に位置している。遺跡から西へ1kmほど行くと東山丘陵の先端部に達し、そこから地形は西方に大きく傾斜し、濃尾平野を一望に見渡すことができる。

調査地の周辺には現在、名古屋大学の諸施設が立ち並んでいる。調査地周辺の地形は、1942年にはじまる名古屋大学の東山キャンパスへの移転に伴う、大学施設の建設工事により著しく改変されており、それによって多くの窯跡が滅失したと考えられる。

遺跡周辺の現存植生は、コナラ・アバマキなどが混在する二次林が主であるが、遺跡に近接した一部は竹林となっている。（梶原）



第1図 調査地点位置図（国土地理院1:25,000地形図「名古屋南部」を改変）

2 歴史的環境

名古屋市東部丘陵は起伏の激しい丘陵地帯であり、弥生時代以前は、ほとんど遺跡の分布がみられない地域である。

古墳時代中期以降、この地域には古墳時代から古代、中世前半にかけて、須恵器や灰釉陶器、山茶碗の窯跡およそ1000基が築かれ、猿投山西南麓古窯跡群（猿投窯）と呼ばれる一大陶器生産地となった。猿投窯は東山（H）・岩崎（I）・鳴海（N）・折戸（O）・黒笹（K）・井ヶ谷（IG）・瀬戸の7地区に区分されており、今回調査をおこなったH-61号窯（第2図 5-75）は、猿投窯東山地区に属する窯跡である。

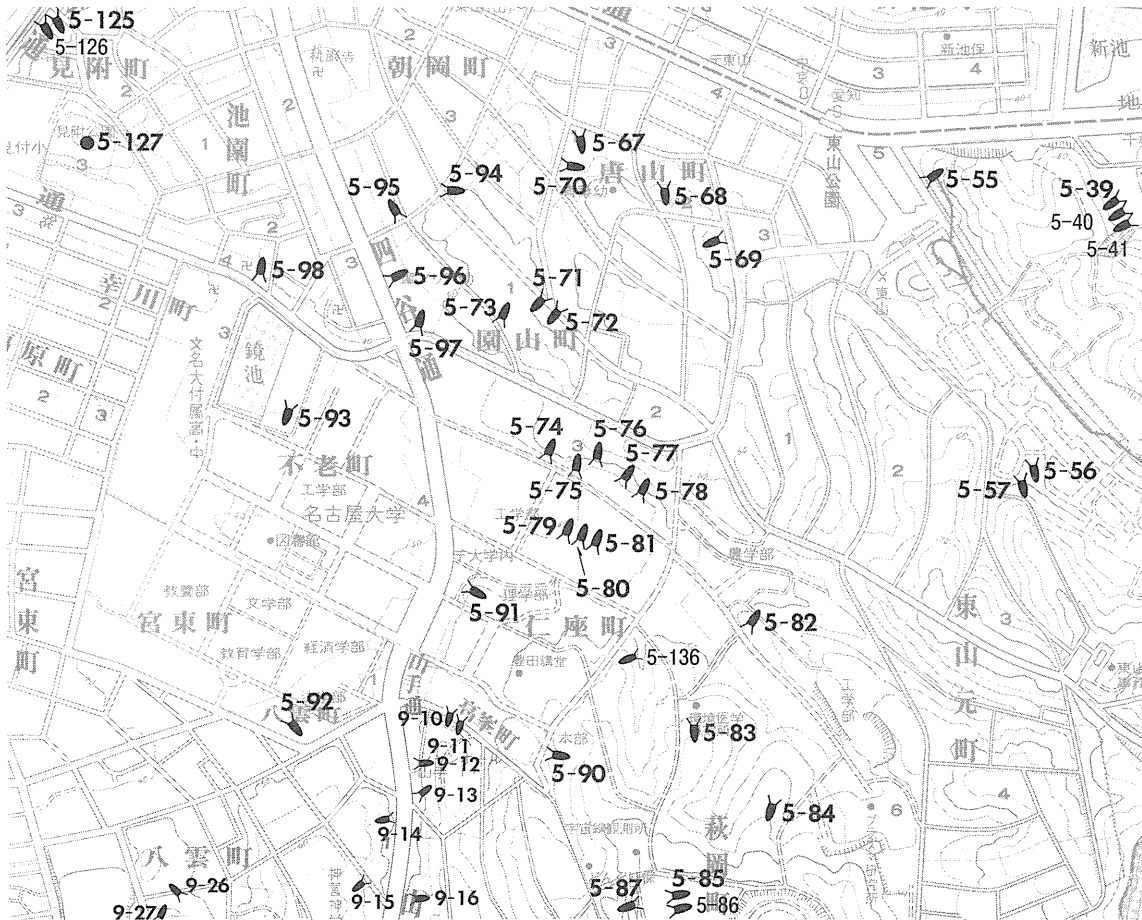
東山地区は猿投窯でもっとも早く須恵器生産がはじまった地区とされ、なかでももっとも古いとされるのが、5世紀中葉頃、本遺跡の西方約1.4kmに築かれたH-111号窯である。以後、東山地区では7世紀までのおよそ200年間に多数の窯が築かれ、尾張地域における窯業生産の中心であった。とくにH-48号窯・H-11号窯・H-10号窯、今回調査をおこなったH-61号窯、蝮ヶ池古窯・H-44号窯・H-15号窯・H-50号窯・H-16号窯などは、猿投窯における須恵器編年のうえでの標式窯となっている。

その後窯場は東山地区から、日進市を中心とした岩崎地区、名古屋市緑区を中心とした鳴海地区へと移動していき、また小牧市を中心とした尾北窯でも大規模な須恵器生産が開始され、東山地区では8世紀後半以降には、ほとんど窯が築造されなくなっていく。10世紀の前半の一時期、灰釉陶器窯が築かれるが、それも長続きせず、10世紀半ばには生産は下火になる。

11世紀後半から12世紀頃になると、東山地区ではふたたび多くの窯が造られるようになる。名古屋大学考古学研究室が2003年1月に発掘調査をおこなったH-114号窯（5-136）の出土遺物は、そのなかでも比較的古相を呈しており、灰釉陶器から山茶碗への移行期の窯とされている^(註1)。その後東山地区では平安時代末～鎌倉時代前期を中心に100基以上の窯が築かれ、山茶碗や瓦が焼成された。そのうち一部の瓦は、京都の鳥羽東殿や鎌倉方面へ運ばれていることが知られる。

名古屋大学の構内には、現在までに須恵器窯が4基、灰釉陶器・山茶碗窯が16基確認されている（第2図）。調査地付近は、大学施設建設にあたっての造成工事に伴い大きく地形が改変され、多くの窯が滅失したと思われるものの、大学構内東半を中心に、いまでも山林として、原地形が残されている部分も多い。また、それまで知られていなかったH-114号窯が、谷筋の厚い流土の下からあらたに発見されたように、名古屋大学構内には未知の窯跡がまだ存在する可能性もあり、今後の調査研究が期待される。（梶原）

（註1）H-114号窯の調査成果については、既に報告書（尾野ほか2006）を刊行済みであるが、同書に収録できなかった炭化材についての放射性炭素14年代測定結果を、本書に付編として収録した。



遺跡番号	遺跡名称	時代	遺跡番号	遺跡名称	時代	遺跡番号	遺跡名称	時代
5-39	H-69号窯		5-78	H-G-35号窯	平安	5-97	H-13号窯	
5-40	H-70号窯		5-79	H-G-36号窯	平安	5-98	H-63号窯	奈良
5-41	H-71号窯		5-80	H-G-37号窯	平安	5-125	H-48号窯	古墳
5-55	H-G-59号窯	平安	5-81	H-G-38号窯	平安	5-126	H-49号窯	古墳
5-56	H-G-8号窯	平安	5-82	H-G-30号窯	平安	5-127	入船山古墳	古墳
5-57	H-G-3号窯	平安	5-83	H-G-23号窯	平安	5-136	H-114号窯	平安
5-67	H-47号窯	古墳	5-84	H-G-24号窯	平安	9-10	H-53号窯	平安
5-68	H-59号窯		5-85	H-G-31号窯	平安	9-11	H-G-54号窯	平安
5-69	H-45号窯		5-86	H-G-32号窯	平安	9-12	H-102号窯	平安
5-70	H-12号窯		5-87	H-G-33号窯	平安	9-13	H-1号窯	平安
5-71	H-8号窯		5-90	H-G-20号窯	平安	9-14	H-90号窯	平安
5-72	H-9号窯	平安	5-91	H-G-48号窯	平安	9-15	H-41号窯	平安
5-73	H-46号窯	古墳	5-92	H-35号窯	平安	9-16	H-40号窯	古墳
5-74	H-39号窯	古墳	5-93	H-66号窯	古墳	9-26	H-42号窯	奈良
5-75	H-61号窯	古墳	5-94	H-G-56号窯	鎌倉	9-27	H-91号窯	平安
5-76	H-G-28号窯	平安	5-95	H-57号窯				
5-77	H-72号窯	平安	5-96	H-58号窯				

第2図 調査地点周辺遺跡分布図 (S=1:11,000 名古屋市遺跡分布図「千種区」「昭和区」を改変)

Ⅱ 調査に至る経緯と調査経過

1 発掘調査に至る経緯

名古屋大学東山地区において、理系中華食堂・理系カフェテリアの改築・拡張工事の計画が策定され、その拡張予定範囲地内に、理系中華食堂の北西側に隣接する遺跡であるH-61号窯およびその灰原が想定される遺物散布地一帯が含まれていることがあきらかになった。そのため、工事に伴う埋蔵文化財の取り扱いの参考とするべく、遺跡の範囲を確認するための調査を実施する必要が生じ、名古屋大学施設部より依頼されて、名古屋大学文学研究科考古学研究室が発掘調査をおこなった。その結果、懸念されていたとおり、灰層を含む遺跡の範囲は拡張工事予定地一帯に及んでおり、理系中華食堂のすぐ脇にまで達していることが判明した。

この範囲確認調査の成果をうけ、名古屋大学施設部では工事計画を見直し、遺物包蔵地へ拡張はおこなわずに、理系中華食堂および理系カフェテリアの敷地内に、2階建ての建物を建て替えることとなった。現在は理系専門書店およびカフェ、食堂が入る、名大生協運営の福利厚生施設「FOREST」となっている。(梶原)

2 調査経過

旧知のH-61号窯採集遺物については、理系中華食堂の北西側の法面付近より採集されたものであることが知られており、調査前の観察でも、この面には厚さ数十cm程度の灰原と思われる黒色土層（灰層）が観察された。この黒色土層は、斜面上部にいくに従って薄くなっていることから、窯体は理系中華食堂の北北西側の斜面上部に存在するとの想定がなされた。ちょうどそのあたりには斜面の傾斜が緩くなる平坦面が存在しているため、窯の前庭部ではないかとも思われたが、後世の地形の改変による可能性も考えられた。

そのため、調査に際しては以下の4ヶ所にトレンチを設定することとした（第3図）。

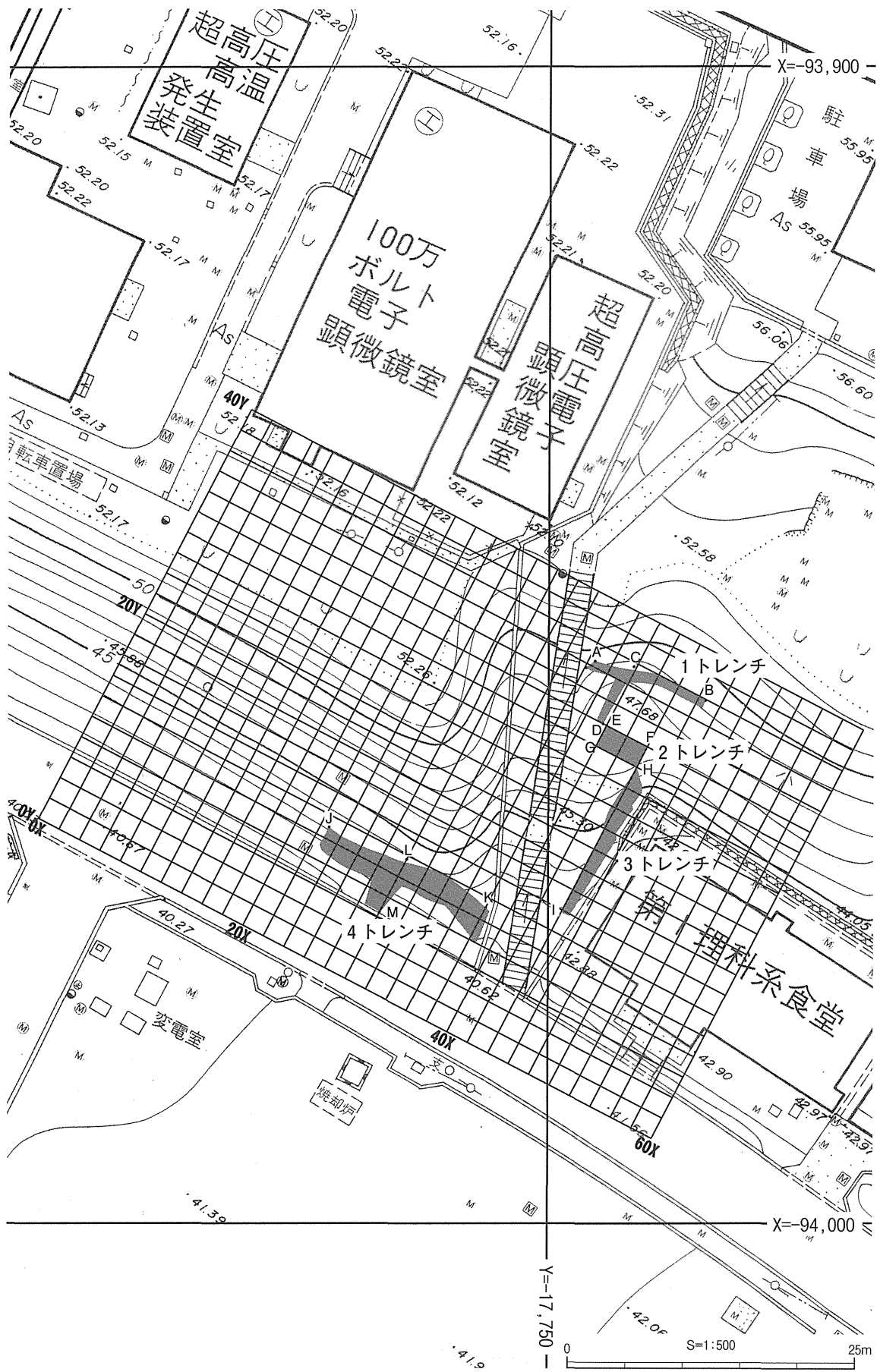
まずは、窯体の正確な位置確認をめざして、平坦面のやや斜面上方に、等高線とほぼ平行させて長さ9m×幅0.8mのトレンチを設け、このトレンチの西端から約3mの位置から、斜面下方に向けて長さ4m×幅0.8mのトレンチを延ばした（1トレンチ）。

次に、灰層の上端を確認するため、平坦面に2m×4mの調査区を設定した（2トレンチ）。

さらに、遺物が採集されていた理系中華食堂北西側の法面を精査することで、灰層の堆積状況を確認し、さらに斜面下方に向かってトレンチを拡張することで、灰層下端の確認をめざした（3トレンチ）。

最後に、灰層の北西方向への広がりおよび厚さ、灰層の下端および、隣接するH-39号窯の灰原との関係を確認するため、斜面下端全体に、等高線とほぼ平行させて長さ約16mのトレンチを設定した（4トレンチ）。

これらのトレンチは、2トレンチを除き、地形や伐採を許可されなかった草木の存在などに制



第3図 調査区設定図 (S=1:500)

約されて、やや不定形の形状となっている。

本調査は、まず調査予定地周辺の伐開を行い、トレンチを設定した後、人力による掘削をおこなった。ただし4トレンチにおいては、上面に厚い盛土の堆積が認められたため、灰層上面まで重機をもちいての掘削をおこなった。

灰層の広がりを確認した後、4トレンチにおいては、灰層の厚さと重なりを確認する目的で、トレンチ北東面に沿って、幅20cmほどのサブトレンチを入れ、その部分のみ地山層まで掘り下げた。その途上で黒色系の灰層の間に、黄白色の間層を検出したので、サブトレンチではおおむね間層より上層と下層に分けて遺物を取り上げた。

遺物の取り上げは、ほぼ斜面の傾きに合わせる方位で、調査区全域にわたって設けた2m方眼のグリッドごとに行った。グリッド設定に際しては、等高線と平行する向きにX軸、それと直行する向きにY軸をとり、それぞれ西から東、南から北へと数値を振った。

遺物取り上げ後、写真撮影、地形測量をおこない、12月12日には調査の全工程を終了した。

(梶原)

発掘調査日誌抄

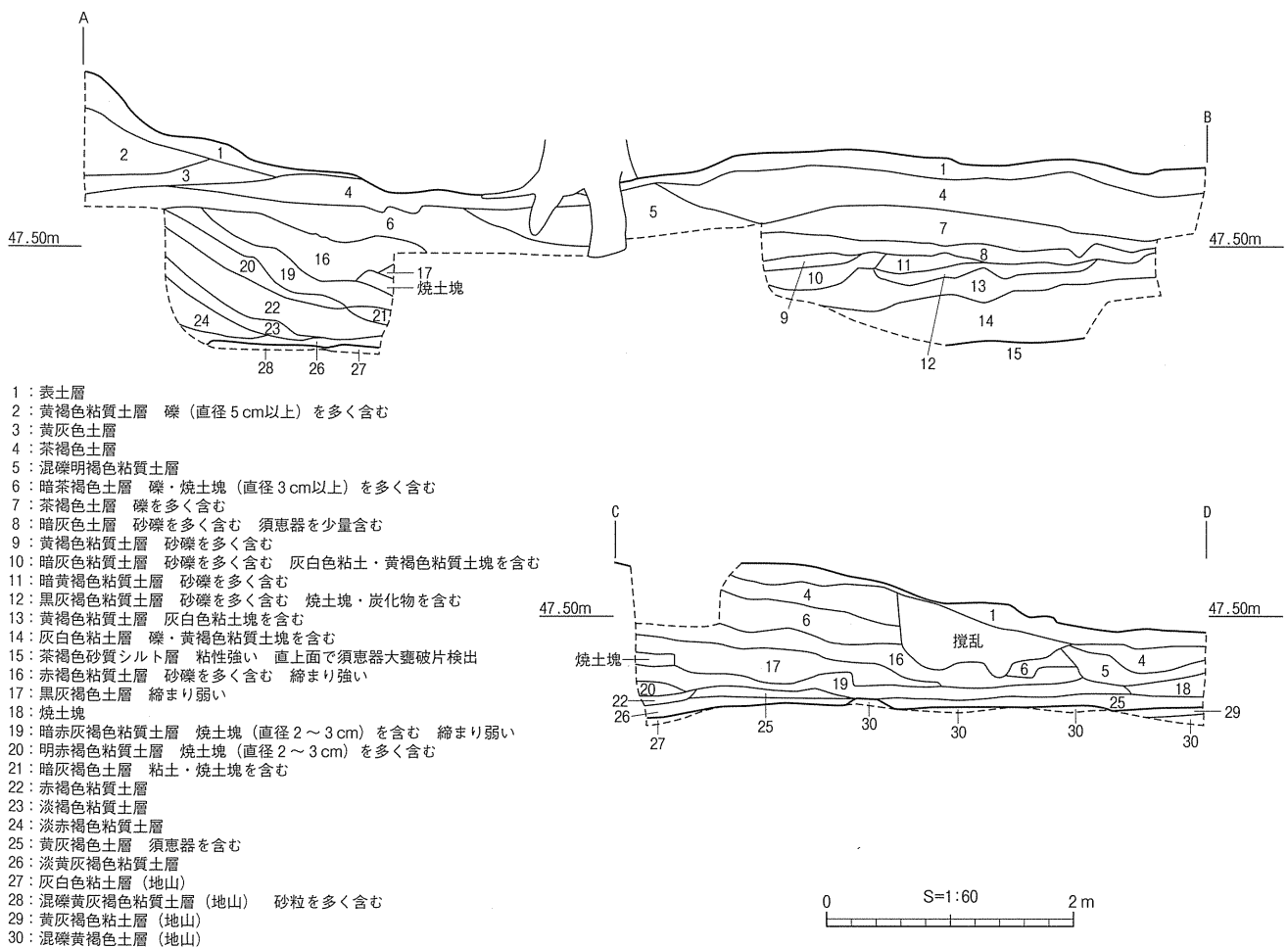
- 11月10日～ 調査開始。器材の搬入、調査区周辺の清掃・伐開。
- 11月12日～ グリッド設定。
- 11月14日～ 3トレンチの法面清掃。
- 11月17日～ 1・2トレンチの掘削開始。
- 11月27日～ 1～3トレンチ、実測開始。
- 12月1日～ 4トレンチの表土を重機で掘削。
- 12月5日～ 調査区の平板測量。4トレンチ北壁にサブトレンチを入れ、壁面実測。
- 12月9日～10日 埋め戻し。撤収。

III 1 トレンチの調査

1 基本層序

1 トレンチはこれまで遺物が収集されていた地点の斜面上方、地形がやや平坦になっている部分のさらに上方の、標高約48mあたりの位置に設定したトレンチである。この付近は地形的に周囲よりやや窪んでおり、窯体または窯の前庭部が存在する可能性が高いと判断した。グリッドとしては40X-35Y付近から、東へ約6mのトレンチをまず設定し、さらに西方に約3m、南西方に約4mトレンチを拡張し、窯体の位置確認をめざした。

1 トレンチにおいては、10cm程度の表土層（第4図1層）の下層に、厚い整地土層（2～14・16～26層）が確認された。整地土層はトレンチ南端では約1m、東側では1m50cm程度、西端においては2m以上に達している。各地点における土質はやや異なっており、東側では粘性の高い灰色系土が多く、西側や南側では、褐色系の土が目立ち、また窯壁とも思われる焼土塊や山茶碗の焼台などを多く含む層（18～21層）も確認された。トレンチ西側では、既設のコンクリ



第4図 1 トレンチ土層断面図 (S=1:60)

ート製の階段の方向に向けて、盛り上げるように斜めに整地土の堆積が確認されており、この階段の敷設に伴い、付近の窯を破壊した排土を持ち込んで整地をおこなった可能性が高い。

地山層（15・27～30層）については、トレンチの各部分とも、46.7mあたりの均一のレベルで検出されており、階段敷設前にこの位置に平坦地が存在したと思われる。その年代についてはあきらかにし得ないが、大学関係施設の造営に関する整地の可能性も高いと考えられる。H-61号窯に関する遺構は検出されなかった。（梶原）

2 出土遺物

1 トレンチでは、表土層（第4図1層）と黒灰褐色土層（17層）より下層からの出土品が分け取り上げられているが、いずれの取り上げ区分の中にも、平安時代末期の無施釉陶器である「山茶碗」が含まれており、後世に大きく改変を受けていることは明らかである。したがって、ここでは特に出土層位にこだわらず、1 トレンチ出土品について一括して取り扱うこととする。

出土遺物には、須恵器・埴輪・「山茶碗」のほか、窯壁片とみられる焼土塊などがある。

a. 須恵器（第5図1～12）

須恵器には、蓋杯・高杯・横瓶・甕などの器形が認められる。

1～4は、蓋杯の身。蓋受け部の最大径が16cm前後の大型の一群（1・2）と、12cm前後の小型の一群（3・4）があり、中間的な大きさのものは見受けられない。底裏に、「キ」の字状の線刻（ヘラ彫り）が施されている破片（2）は、蓋受け部が遺存していないが、残存部の形状から大型の一群と推定した。

5～7は、高杯の脚部。有蓋高杯の脚部と考えられるスカシ窓のないもの（5）と、スカシ窓が穿孔された無蓋高杯の脚部とみられるもの（6・7）の2種があり、スカシ窓はいずれも三方に配されていたと推定される。6・7は、下面に顕著な降灰が認められるので、伏せ焼き（倒立状態で焼成）されていたのかもしれない。

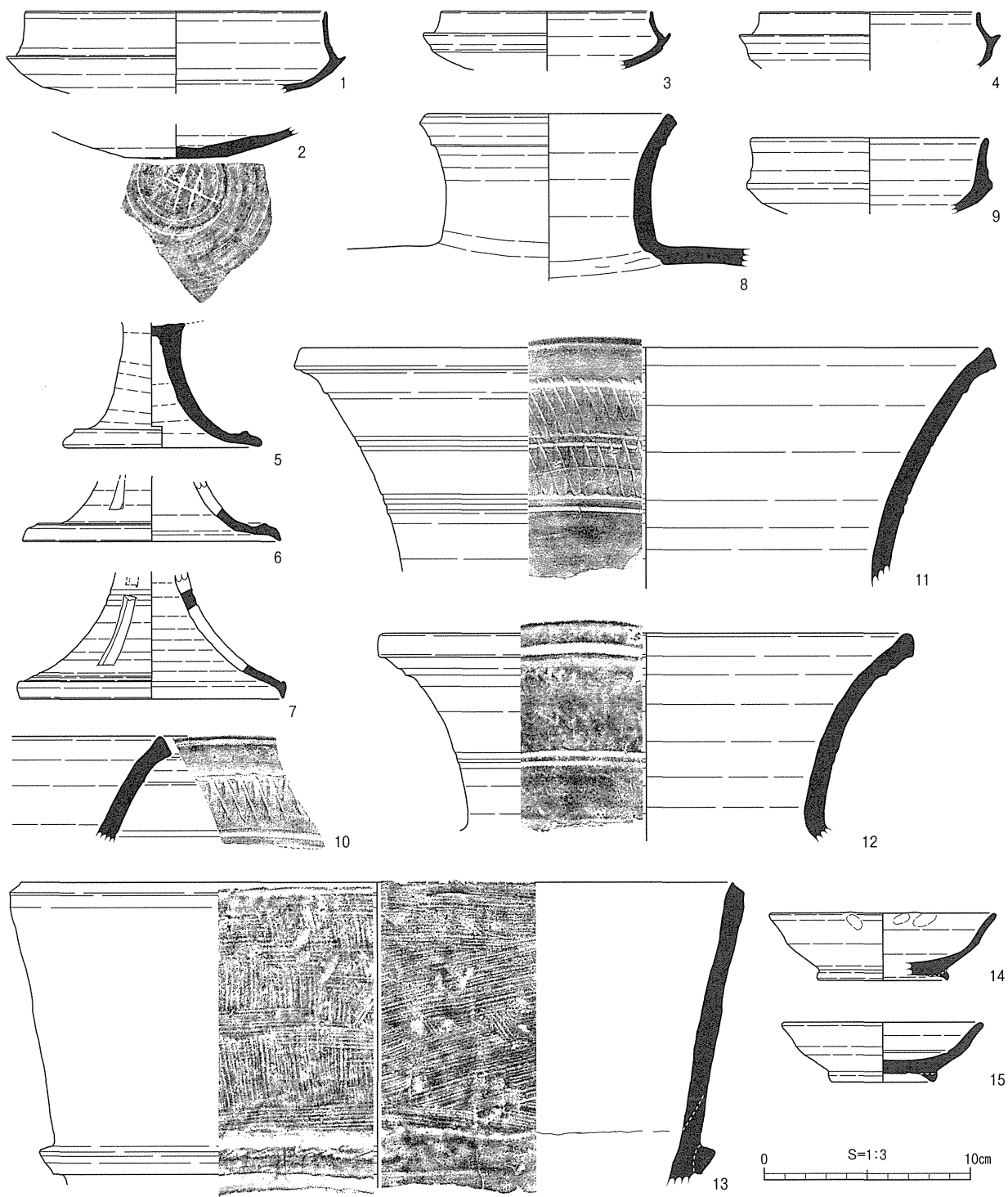
8は、横瓶の頸部。胴部は、タタキ手法を用いて成形されたと考えられるが、外面のタタキ板の痕跡も、内面の当て具の痕跡も、ほとんどナデ消されている。

9は、器形の特定が難しいが、後述する4 トレンチ出土品（142）との形態的類似性から、子持器台の子杯（無蓋）と推定した。

10～12は、甕の口縁部。いずれも外面に櫛描波状文が施されている。この他に図示していないが、甕の胴部片が多数出土している。いずれも、外面には平行線が刻まれたタタキ板の痕跡が残っているが、内面の当て具痕跡はナデ消されており、ほとんどその痕跡をとどめていない。

b. 埴輪（第5図13）

円筒埴輪が3片出土しているが、全て同一個体である（13）。焼成はやや軟質気味で、内外面に「ハケメ」^{註1)}調整の痕跡が顕著に認められる。外面には縦ハケの後に疎らに横ハケ、内面に



第5図 1 トレンチ出土遺物実測図 (S=1:3)

は垂直方向に近い斜めハケの後に水平方向に近い斜めハケが施されている。

c. 「山茶碗」(第5図14・15)

平安時代末期から中世にかけて生産された無施釉陶器、いわゆる「山茶碗」である。碗・小碗・稜皿が出土しており、ここでは全形を窺うことのできる輪花が施された小碗(14)と稜皿(15)を図示した。いずれも右回転(時計回り)で成形(水挽き)されており、高台は付高台である。高台畳付には、特に靱殻圧痕や砂粒の付着を認めない。この他に、図示していないが、「山茶碗」の焼成に用いられたいわゆる「馬爪焼台」が少なからず出土している。(尾野)

(註1) 現在、「ハケメ」と通称されている成形・調整痕跡は、実際には木片の小口の擦痕と考えられているから、刷毛を連想させる「ハケメ」や「ハケ」という呼称は必ずしも適切ではないが、既に広く定着しているので、ここでは慣例に従っておく。

IV 2 トレンチの調査

1 基本層序

2 トレンチは理系中華食堂建物の北北西、斜面中央部付近の地形的にやや平坦な部分に、南北2 m×東西4 mの、長方形の調査区を設定した。グリッドでは40 X～44 X、28 Y～30 Yの位置にあたる。

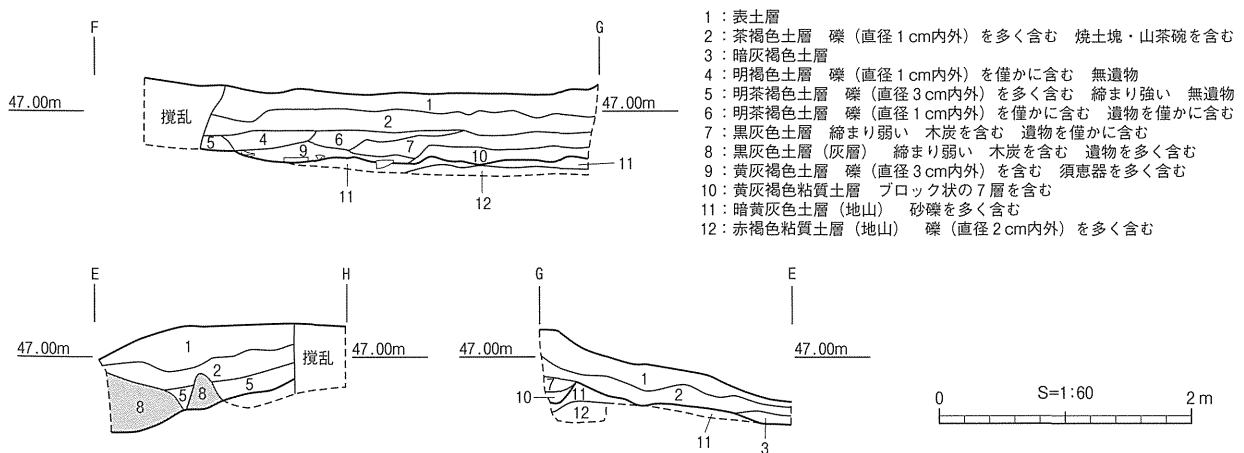
2 トレンチにおいては、10～20cm程度の表土層（第6図1層）の下に、褐色系土（2～6層）、次いで黒灰色系土（7層）、黄灰褐色系土（9・10層）の堆積が確認された。2層には焼土塊や山茶碗片を含んでおり、また地山直上の9層には須恵器片が多く含まれていた。

長方形のトレンチの南半から西南端にかけては、須恵器片を多く含む、締まりの弱い黒灰色土層（8層）が確認されており、これがH-61号窯の灰原である可能性が高い。

地山層（11・12層）は1 トレンチと同様、46.7mあたりのレベルで確認されており、灰層（8層）もやや凹凸はあるものの、おおまかに同レベルより低い位置で残存することから、1 トレンチの項で述べた平坦地の整地により、灰層上端および、おそらく窯体の一部または全部が滅失している可能性が考えられる。（梶原）

2 出土遺物

2 トレンチ出土の遺物については、調査区の西南側で検出された黒灰色土層（灰層：第6図8層）と表土層（1層）、および表土層より下層の整地土層（2～7・9・10層：取り上げ区分名称は「サブトレンチ」）に3区分して取り上げられているが、「山茶碗」が含まれている整地土が後世に攪乱されていることは明らかである。したがって、ここでは黒灰色土層（灰層）出土分とそれ以外に2区分して記述する。



第6図 2 トレンチ土層断面図 (S=1:60)

(1) 黒灰色土層（灰層）出土品（第7図16～22）

量的には必ずしも多くないが、須恵器の蓋杯が出土している。

16～18は、蓋杯の蓋。口径は、14.5～14.8cmと比較的大型で、上面には中心から口径に対して約7～8割の範囲に回転ヘラ削りが施されている。

19～22は、蓋杯の身。蓋受け部の最大径は、14.9～15.4cmとやはり大型で、伴出の杯蓋の大きさに対応している。底裏には、中心から最大径に対して7～8割強の範囲に、回転ヘラ削りが施されている。

(2) 表土・整地土層出土品（第7図23～36・第8図37～45）

須恵器・埴輪・「山茶碗」がある。

a. 須恵器（第7図23～36・第8図37）

須恵器には、蓋杯・高杯・横瓶・甕などの器形が認められる。

23～25は、蓋杯の身。1トレンチ出土品と同様に、蓋受け部の最大径が15cmを超える大型の一群（23・24）と、12cm前後の小型品（25）があり、やはり中間的な大きさのものは見受けられない。いずれも底裏には、中心から最大径に対して7～9割強の範囲に回転ヘラ削りが施されている。

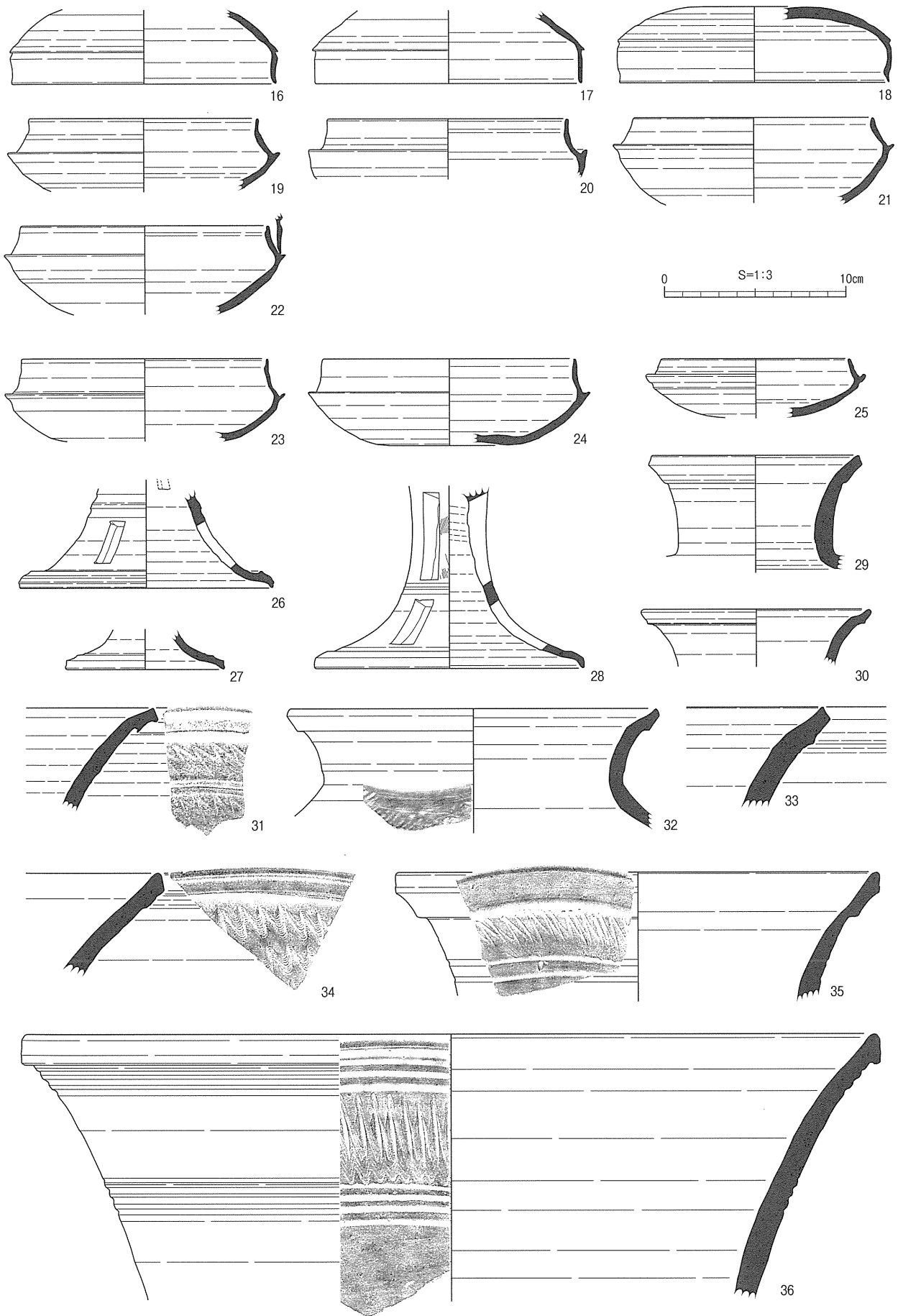
26～28は、高杯の脚部。脚端部径が大きい26と28には、中位に施された二条の沈線の上下に、二段わたってスカシ窓が穿孔されている。いずれもスカシ窓は三方に配されていたと考えられるが、26では千鳥の位置に配置されているのに対して、28では縦に直列の配置となっている。降灰の様子から、26は伏せ焼き（倒立状態で焼成）されていたと考えられる。脚端部径が小さい27には、スカシ窓穿孔の形跡は認められない。

29・30は、壺・瓶類の口縁部。いずれも胴部の形状が判らないため、断定するにはいささか躊躇を覚えるが、29は横瓶、30は広口壺かと思われる。

31～37は、甕の口縁部。32・33のように、無文のものも少なくはないが、多くは外面に櫛描波状文が施されている。ちなみに、図示したのは全て口縁部であるが、胴部片も多数出土している。基本的に、外面には32と同様の平行線が刻まれたタタキ板の痕跡が認められるが、もともと内面の当て具には無文のものが使われていることに加えて、ナデ消されているものが多く、明瞭な痕跡が残っているものはほとんどない。なお、甕の中には、ほとんど広口壺と相似形のもの（例えば32）が含まれるが、本報告では便宜的に口径20cm以上を甕、20cm未満を壺とした。

b. 埴輪（第8図38・39）

タガ（凸帯）をもつ円筒埴輪片が、2点出土している。いずれも硬く須恵質に焼き上げられており、内外面に降灰が認められる（外面に特に顕著）。38・39とも、外面には連続的な横ハケが、内面には断続的な横ハケが施されている。



第7図 2トレンチ出土遺物実測図(1) (S=1:3)

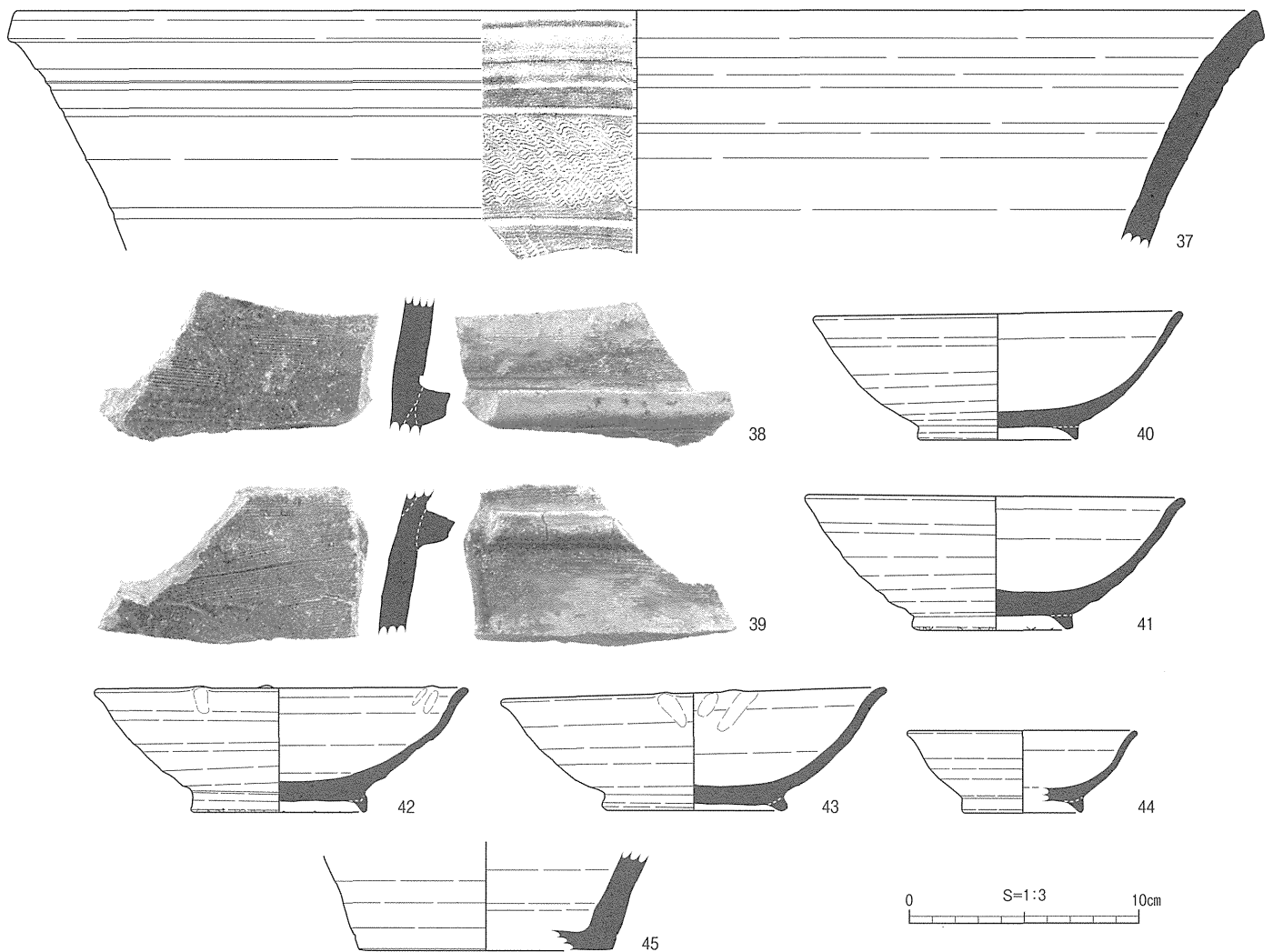
c. 「山茶碗」(第8図40~45)

碗・小碗のほか、壺が出土している。

40~43は碗で、42・43には口縁部に輪花が施されている。輪花は、口縁端部を指で挟んで撫で上げるようにして、碗一個につき推定5箇所施されている。いずれも高台は付高台で、高台内には右回転(時計回り)の糸切り痕跡が残る。40・43については明瞭ではないものの、41・42の高台置付には靱殻の圧痕が認められる。

44は、小碗。高台は付高台で、高台内に右回転(時計回り)の糸切り痕跡が認められる。

45は、平底の壺。底部片のみの出土であるため、全形を窺いえないが、12世紀頃の「山茶碗」窯でしばしば焼かれている三筋文壺などの底部と共通する形状を示す。(尾野)



第8図 2トレンチ出土遺物実測図(2)(S=1:3)

V 3 トレンチの調査

1 基本層序

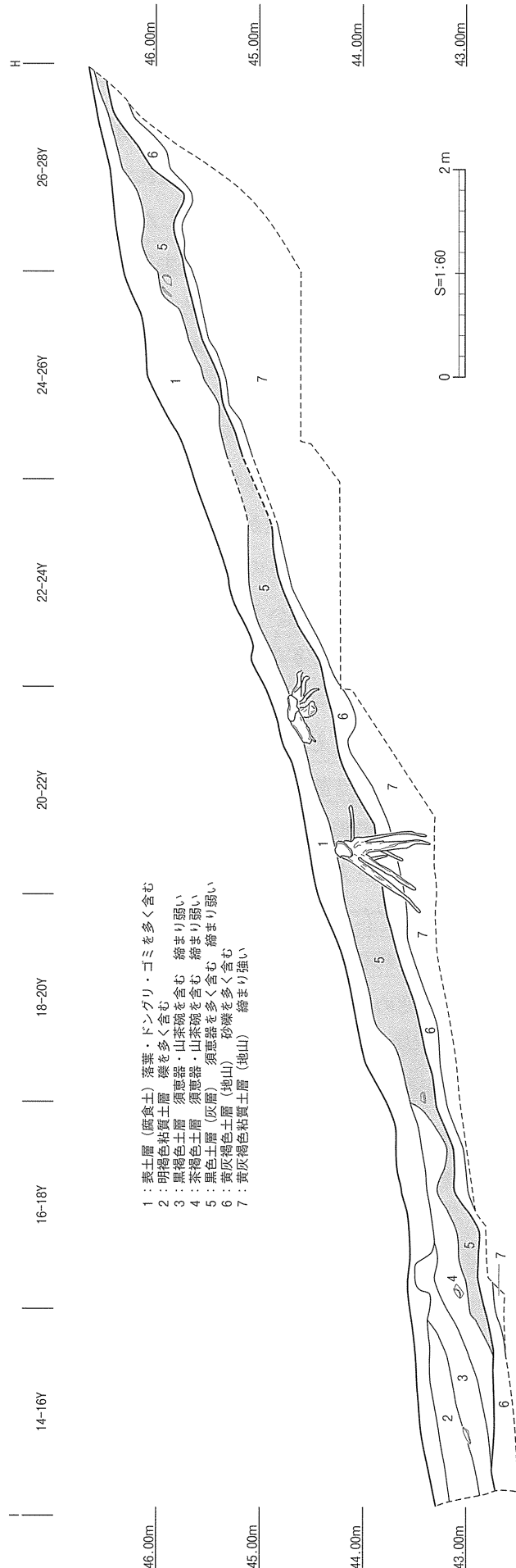
調査開始時には、理系中華食堂北西側の、ブロック塀が設けられている法面を3トレンチとして、灰層の堆積確認をおこなった。グリッドとしては、ほぼ44Xライン上で、18Y～28Y付近までにあたる。

灰層は18Y付近より南西側では、地表面より下に潜ってしまい観察できなかったため、南西方向に約4mの拡張トレンチを掘削し、灰層の下端を追求した。

灰層（第9図5層）は20～50cmの表土層（1層）の直下に存在し、灰層の下はすぐに地山層（6・7層）となっている。灰層は斜面最上端の28Y付近から、薄いながらも確認され、斜面下部にいくに従い徐々に厚みを増していき、20Y～22Y付近では40cm程度に達している。18Yより南西方では、灰層上層が後世の整地（2～4層）により削平をうけており、現存する灰層端部は、16Y付近である。灰層は単一の黒色土であり、灰層内での土色の違いは確認できなかった。

灰層中からは、坏類や高坏を中心とした多くの須恵器が出土しており、とくに斜面の下半、24Y付近より南西方での出土が多い。このあたりでは、表土上においても多くの遺物の散布がみられる。

(梶原)



第9図 3トレンチ土層断面図 (S=1:60)

2 出土遺物

3トレンチでは、表土層（第9図1層）出土品の一部が区別されていたものの、大半の遺物が「壁面清掃」として一括して取り上げられており、その中には明らかに平安時代末期の無施釉陶器である「山茶碗」も含まれている。したがって、ここでは取り上げ区分にこだわらず、3トレンチ出土品を一括して取り扱うこととする。

出土遺物は、その多くを須恵器が占めているが、「山茶碗」や窯壁片とみられる焼土塊なども含まれている。

a. 須恵器（第10図46～75）

須恵器には、蓋杯・高杯・鉢などの器形が認められる。

46～56は、蓋杯の蓋。口径が12cm前後の小型品（46）と、15～16cm前後の大型の一群（47～56）があり、中間的な大きさのものは見受けられない。いずれも上面に、中心から最大径に対して7～9割強の範囲に回転ヘラ削りが施されている。削りの方向は、降灰の影響で判らないものも少なくないが、確認できたものの多くは左回転（逆時計回り）であった。

57～65は、蓋杯の身。いずれも蓋受け部径14.8～16.9cmと大型で、伴出の大型杯蓋（47～56）に対応する身と考えられる。確認できるものの底裏には、中心から最大径に対して7～8割弱の範囲に、回転ヘラ削りが施されている。

66～71は、高杯の脚部。いずれもスカシ窓を有するもので、有蓋高杯の脚部と考えられる。基本的にスカシ窓は三方に配されていたとみられるが、67に限っては、残存部分から復元すると四方スカシとなる。ただし、不均等に配置された三方スカシ窓の間隔が、たまたま狭い部分の破片であるのかもしれない。69・71は、伏せ焼き（倒立状態で焼成）されていたのか、脚部の下面（内面）に降灰が認められる。

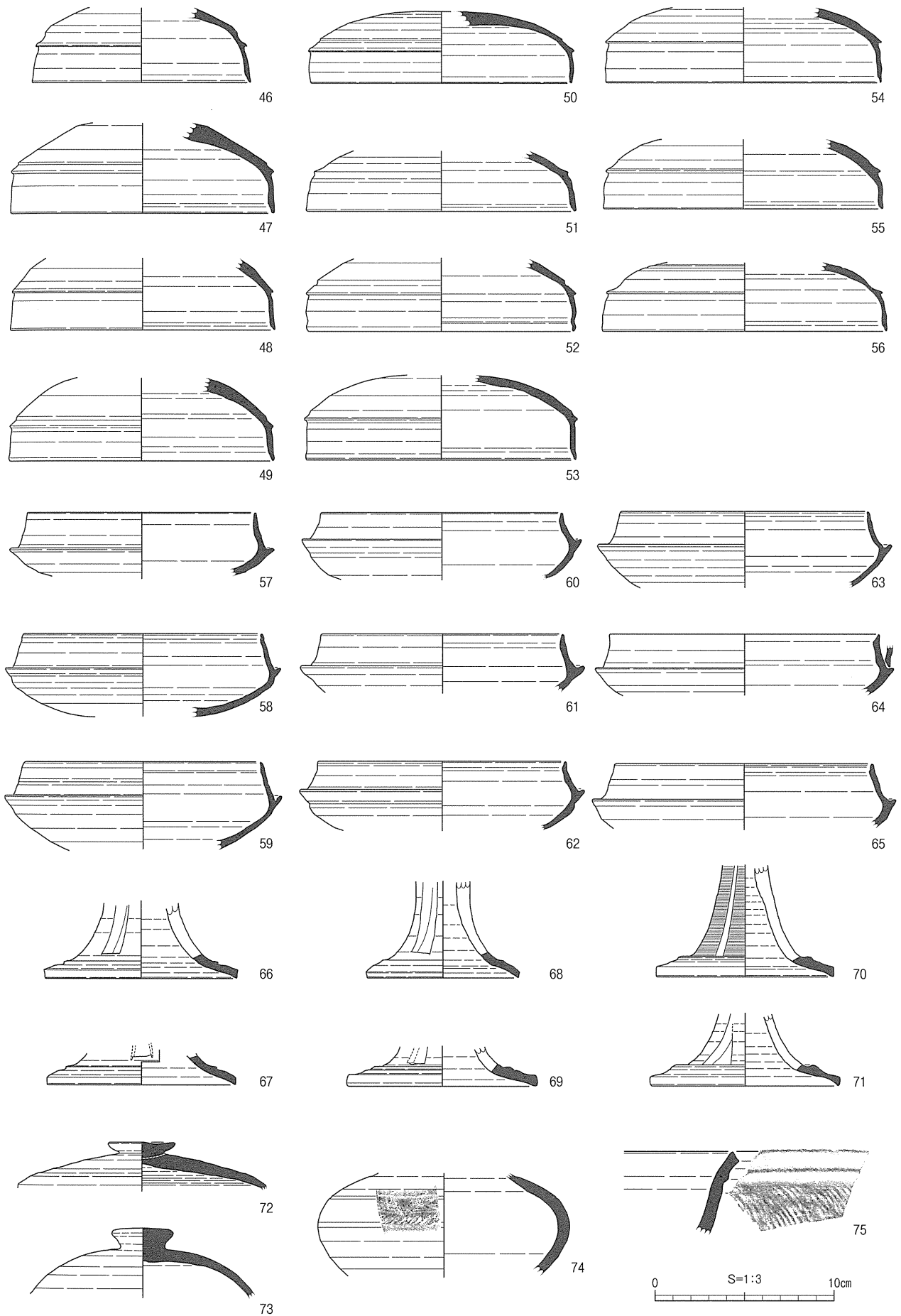
72・73は、高杯の蓋。上面中心部付近には、左回転（逆時計回り）でヘラ削りが施されている。いずれも口縁部を欠いているが、残存部分の径から判断して、前述の杯蓋（46～56）の中に高杯蓋が含まれている可能性がある。

74は、壺もしくは瓶の胴部。肩部に二条の沈線が巡っており、その間に櫛描列点文が施されている。

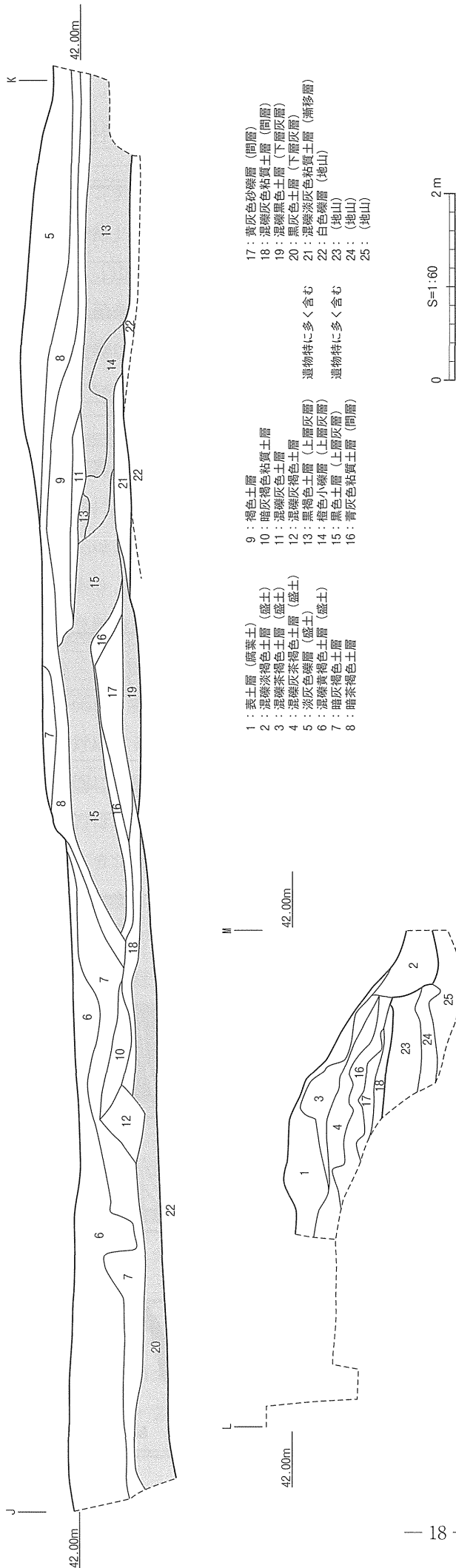
75は、鉢。体部には、外面に平行線が刻まれたタタキ板の痕跡が残っているが、内面の当て具痕跡は丁寧にナデ消されている。

b. 「山茶碗」

碗・小碗が出土しているが、いずれも全形を窺いえない小片であるため、図示しなかった。形質的には、1・2トレンチ出土品と顕著な差異は認められない。（尾野）



第10図 3トレンチ出土遺物実測図 (S=1:3)



第11図 4トレンチ土層断面図 (S=1:60)

VI 4 トレンチの調査

1 基本層序

4トレンチは理系中華食堂の西方、コンクリート製の階段の西側の斜面下端に、約15mにわたり設定した。グリッドではほぼ11~12Yライン上で、23X~38X付近までにあたる。また、灰層下端を確認する目的で、28X付近を中心に、南西方向への拡張をおこなった。

この地点では、約40~60cmにおよぶ厚い盛土(第11図5・6層)および暗色系の土(7~12層)で整地されており、この整地土層を重機で除去すると、黒色系の灰層が、調査区全面において検出された。

灰層直上からは、須恵器の杯類、高杯類、甕類をはじめ、陶製の埴輪なども含め多くの遺物が出土し、灰層内には豊富な遺物が包含されることが予想された。灰層のレベルはトレンチの南東方では約41.8~41.9m、北西側では約41.4mと、北西側ではやや低くなっており、灰層の西端が近い可能性も予想された。

このため、さらに調査区を北西側に拡張し、灰層の西端を追求することも考えたが、盛土の堆積が非常に厚く、拡張は困難を極めることが予想されたため、まずは調査区北東壁に沿って、幅約20cmのサブトレンチを入れ、調査区内における灰層の厚さと堆積状況の確認をめざした。その結果、色調の

微差により、灰層はいくつかの単位に分けることができたが、特筆すべきは、25X～31Xあたりの、レベル41.5m付近において、黄灰色系および灰色系の、明確に色調の異なる間層（16～18層）が検出されたことである。間層は砂礫を含むやや粘質の土で、堆積は最大でも約20cm程度と薄く、また黒色の灰層からは多量の遺物が検出されたが、この間層からの遺物の出土は極端に少なかった。

この間層を挟んで灰層は大きく2つに分けられ、28X付近より南東側では、間層より上層に黒色系の灰層（13・15層）が、また33X付近より北西側には、間層より下層に黒色系の灰層（19・20層）が、それぞれ地山層（22層）の直上に乗る形で確認された。

下層の灰層（19・20層）は調査区の北西にいくほど厚く、さらに北西側への広がりが見られ、調査区の北東側の斜面上に想定されるH-61号窯の灰原としては、やや不自然な堆積状況とも考えられた。H-61号窯の西側には、隣接する須恵器窯として、H-39号窯が存在しているとされており、下層（19・20層）の灰層はH-61号窯のものではなく、H-39号窯の灰原の東端である可能性も考えられた。

このため、灰層はH-39号窯の灰原として、さらに北西側へ広く続いている可能性も考えられることから、灰層西端を確認するための拡張については、おこなわないことにした。

16層～18層の間層の検出後、19・20層の出土遺物については、それまでの灰層（13～15層）出土の遺物とは分けて取り上げをおこない、遺物の比較をおこなった。その結果、19・20層出土遺物は、13～15層出土遺物より、やや古相を帯びていることが判明した。詳細は本章の2節で述べる。

また南東側の灰層では、13層と15層の間に、これも遺物の少ない橙色系の間層である14層が検出された。とくに上層の灰層（13層）からは、多くの遺物が出土している。

南西方向への拡張区では、黒色系の明確な灰層は確認されず、黄白色系の間層の延長部のみが検出された。この層は南西方向に行くに従い徐々に厚みを薄くし、7Y付近で、おそらく道路か側溝の工事に伴う整地により、削平をうけて消失している。灰原下端はおそらくこのあたりなのであろう。

（梶原）

2 出土遺物

4トレンチでは、表土層から灰層上面まで（第11図1～12層）と、灰層（13～20層）で出土品が分けて取り上げられており、灰層についてはさらに上層（13～15層）・間層（16～18層）・下層（19・20層）の3層に区分がなされている。したがって、以下この4区分の取り上げ層位ごとに記述を進める。

（1）下層灰層出土品（第12図76～99）

須恵器のほかに、焼台と推定される窯道具がある。

a. 須恵器（第12図76～98）

須恵器には、蓋杯・高杯・提瓶・器台・甕などの器形が認められる。

76～78は、蓋杯の蓋。口径12cm前後の小型の一群（76・77）と、口径が15cmを超えると推定される大型品（78）があり、いずれも上面中心付近には回転ヘラ削りが施されている。小破片が多かったため、図示したのは3点のみだが、非図化分を含めても大型品はごく少なく、多くは小型品で占められている。

79～85は、蓋杯の身。杯蓋の大きさと対応するように、蓋受け部の最大径が12cm前後の小型の一群（79～84）と、16cmを超える大型品（85）があり、中間的な大きさのものは見受けられない。いずれも底裏には、中心から最大径に対して8割前後の範囲に回転ヘラ削りが施されている。量比は、杯蓋と同様に小型品が圧倒的に多く、大型品はごく僅かである。

86～88は、高杯の脚部。スカシ窓のないもの（86・87）と、推定三方にスカシ窓が穿孔されたもの（88）の二種があり、前者は有蓋高杯、後者は無蓋高杯かと思われる。無蓋高杯の脚部と推定される88は、内面（下面）に降灰が認められるので、他のスカシ窓付高杯と同様に、伏せ焼き（倒立状態で焼成）されていたのかもしれない。

89～91は、提瓶か。環状の把手が付けられた90・91は、肩部の破片であろう。

92・93は、広口壺の頸部。92には、凸帯以外に特に施文は認められないが、93の外面には櫛描波状文が施されている。僅かに残っている胴部には、外面に平行線が刻まれたタタキ板の痕跡が認められ、内面にはナデが施されているが、部分的に無文当て具の痕跡が残っている。

94は、甕もしくは鉢の胴部に付けられたとみられる把手。

95・96は、器台。残存部の形状から、95は高杯形器台の脚部と考えられる。二段以上にわたって、三角形のスカシ窓が推定六方に穿孔されている。96は筒形器台の脚端部で、上段に三角形、下段に長方形のスカシ窓が千鳥の配置で開けられている。下端部には、団子状の粘土塊の付着痕跡が2箇所認められ、これは窯詰めの際に用いられた焼台の痕跡かと思われる。

97・98は、甕の頸部。いずれも外面に櫛描波状文が施されている。

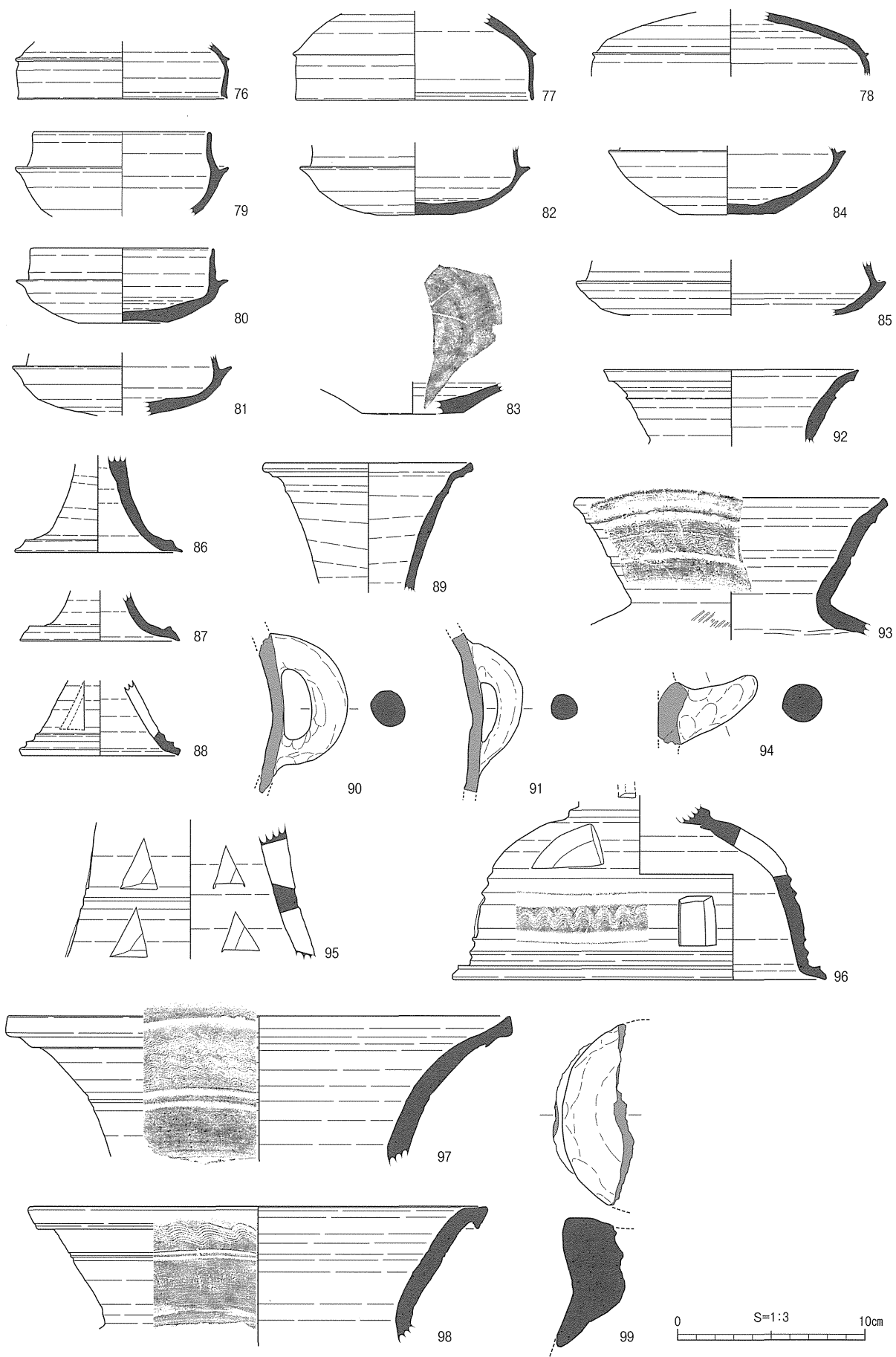
b. 窯道具（第12図99）

中位がくびれた鼓のような形状を示す粘土塊。須恵器と同様の精良な粘土を用いて作られているが、表面のナデが非常に粗く、全体に雑な作りであることから、器物の窯詰めの際に支持具として用いられた焼台と推定した。

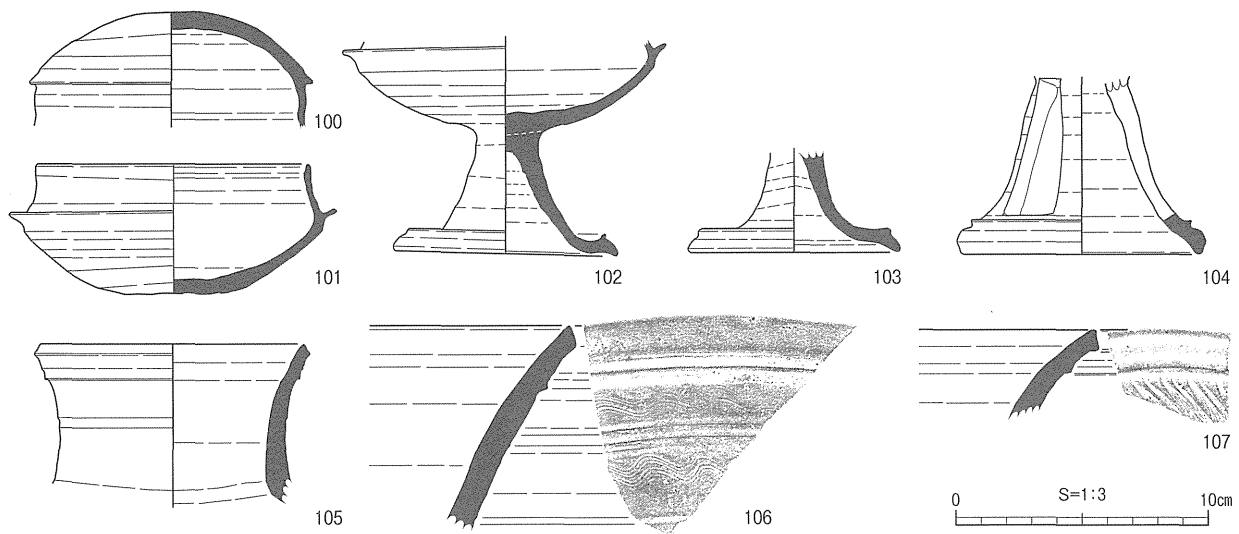
（2）間層出土品（第13図100～107）

須恵器の蓋杯・高杯・横瓶・甕などがある。

100は、蓋杯の蓋。口縁部を欠いているが、口径は12cm未満と推定される。上面には、中心から最大径に対して9割強の範囲に回転ヘラ削りが施されているが、降灰のために回転方向は確認できない。



第12図 4トレンチ出土遺物実測図(1) 下層灰層 (S=1:3)



第13図 4トレンチ出土遺物実測図(2) 間層 (S=1:3)

101は、蓋杯の身。蓋受け部の最大径は12.9cmで、底裏には中心から最大径に対して7割弱の範囲に、左回転（逆時計回り）でヘラ削りが施されている。

102～104は、高杯。102の有蓋高杯は、惜しくも口縁部を欠くが、杯部と脚部が接合できた稀有な事例で、脚部にスカシ窓は認められない。102との形態的類似性からみて、103も有蓋高杯の脚部と考えられる。これに対して、推定三方にスカシ窓が穿孔されている104は、無蓋高杯の脚部と考えられるもので、102・103と較べると脚部高にも顕著な違いが認められる。

105は、横瓶とみられる壺・瓶類の頸部。内外面共に降灰が顕著に認められる。

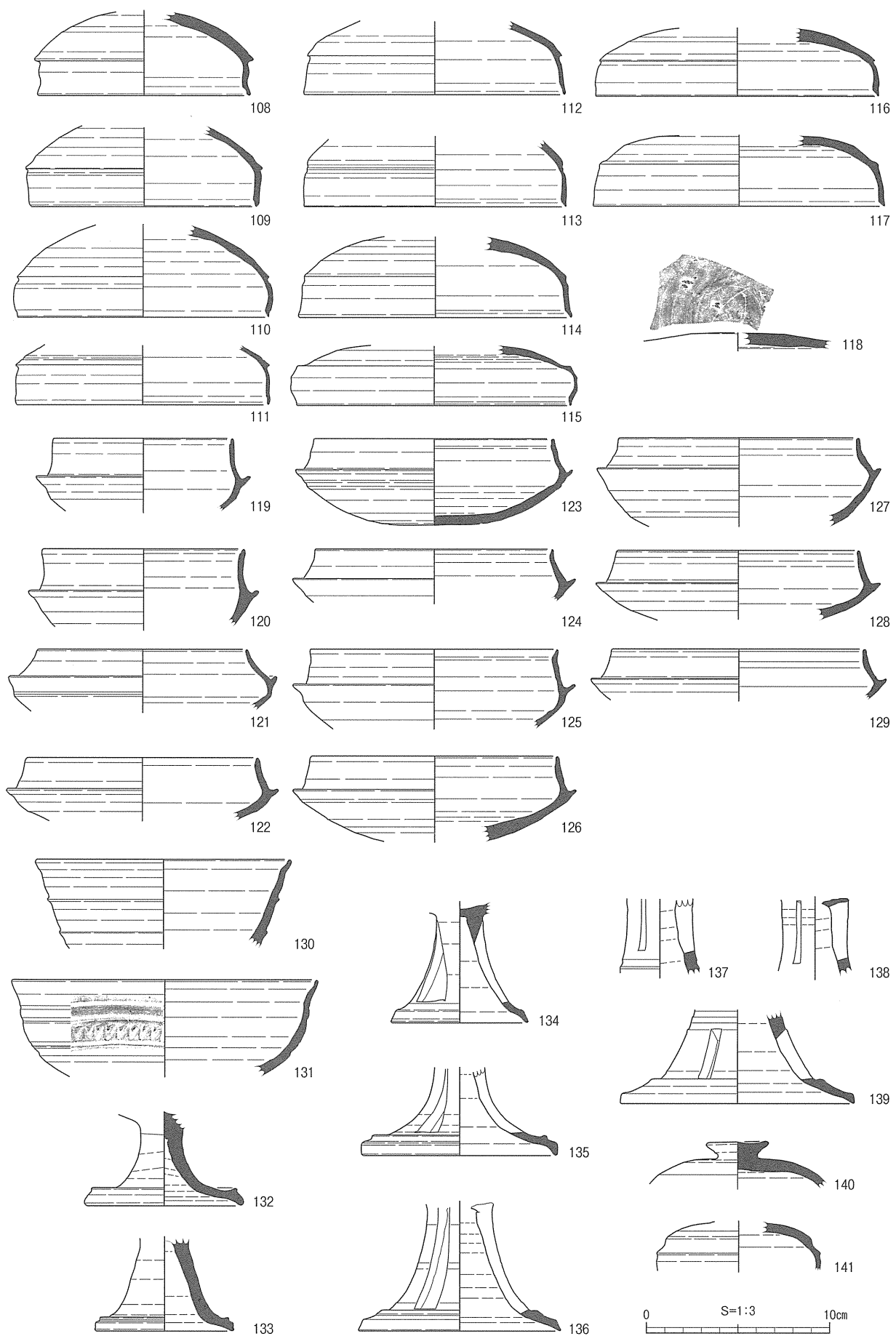
106・107は、甕の口縁部。いずれも外面に櫛描波状文が施されている。

(3) 上層灰層出土品（第14図108～141・第15図142～150）

須恵器が多く出土している。この層からの、明らかな「山茶碗」の出土はない。

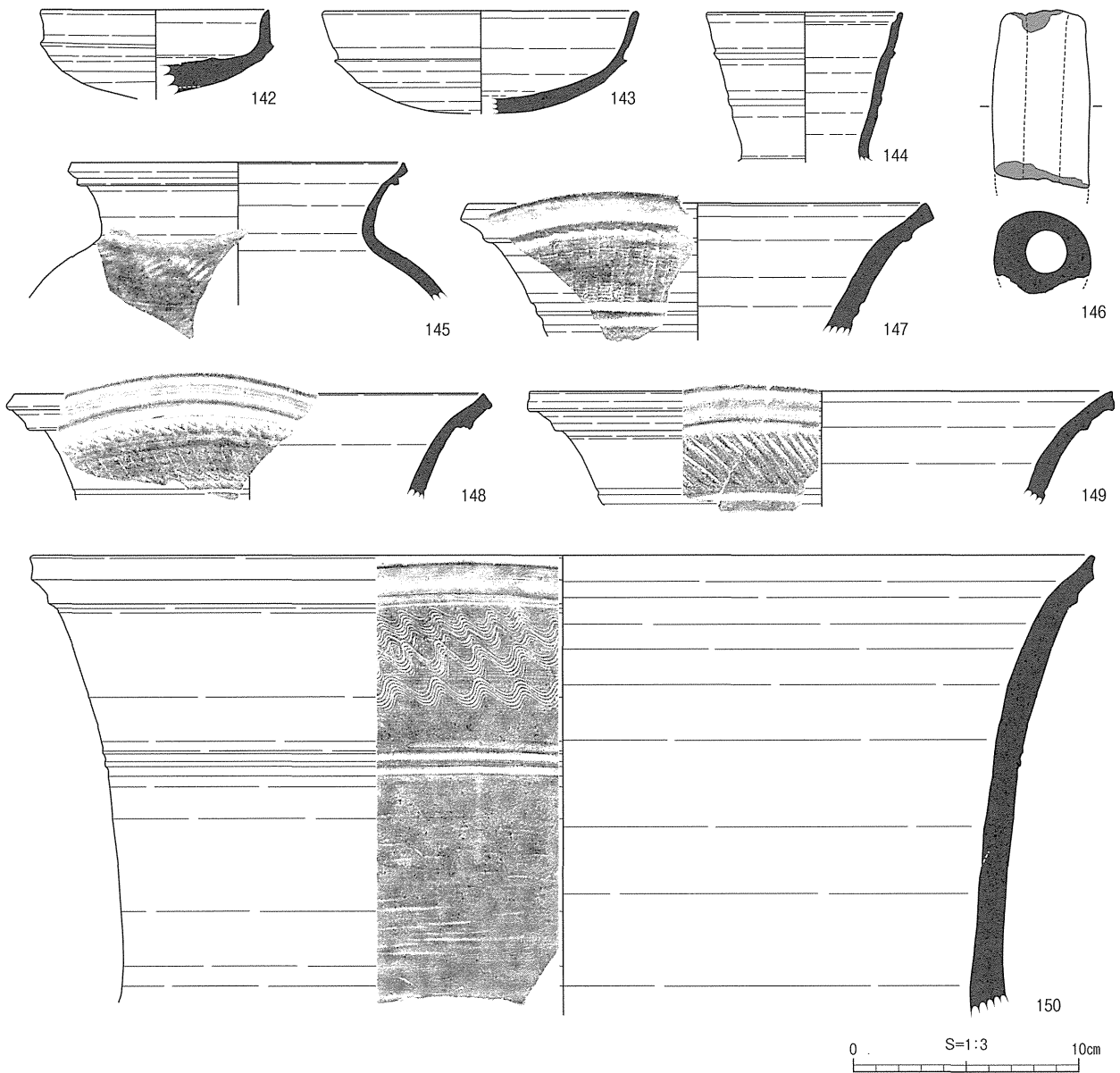
108～118は、蓋杯の蓋。口径12cm前後の小型品（108・109）が少数認められるものの、圧倒的に多くを口径13.5cm以上の大型品（110～118）が占めている。確認できるものは、いずれも上面に回転ヘラ削りが施されており、その範囲は中心から最大径に対して7～8割強の範囲に及んでいる。なお、上面に焼成前の線刻が認められる破片（118）は、口縁部が遺存していないが、残存部の形状から大型品と判断した。削りの際のロクロ回転方向は、降灰の影響ではっきりしないものも少なくないが、左回転（逆時計回り）が多いように見受けられる。ただし、右回転（時計回り）とみられるものも散見される。

119～129は、蓋杯の身。蓋と同様に、蓋受け部の最大径が12cm前後の小型品（119・120）と、14cm以上の大型品（121～129）に分けられる。いずれも底裏には、中心から7～8割前後の範囲に回転ヘラ削りが施されている。削りの際のロクロ回転方向は、左回転（逆時計回り）のものが多いが、右回転（時計回り）も少数認められる。



第14図 4 トレンチ出土遺物実測図 (3) 上層灰層 (S=1:3)

130・131は、無蓋高杯の杯部。131の外面には、櫛描波状文が施されている。
 132～139は、高杯の脚部。スカシ窓の穿孔が認められない132・133は有蓋高杯、スカシ窓をもつ134～139は無蓋高杯かと思われる。無蓋高杯と推定される134～139は、やや軟質の焼成である。139を除くと、いずれも下面（内面）に顕著な降灰が認められるので、伏せた状態で窯詰めされていた確率が高い。スカシ窓の配置は、いずれも推定三方。
 140・141は、有蓋高杯の蓋。ただし、口径の小さい141は、壺蓋であるかもしれない。いずれも、上面に降灰が認められる。



第15図 4トレンチ出土遺物実測図（4）上層灰層（S=1:3）

142は、蓋杯の蓋に似た形状の器だが、ロクロ成形後に粘土を足して何かと接着したような形跡が下面（底裏）に認められることから、子持器台の子杯（無蓋）と推定した。内面（見込み）には、ヘラ状工具で突いたり擦ったりしたような痕跡があり、これは器台との接合時の工具痕跡かと思われる。

143も、やはり蓋杯の蓋に似た形状の器だが、口縁部の形状がいささか異なっていることや、内面に降杯が認められることから、鉢状の器形を想定して図示した。やや口径が大きいのが、142と同様に子持器台の子杯（無蓋）かもしれない。

144は、壺・瓶類の頸部。頸部中ほどに、二条の凸帯が作り出されている。

145は、広口壺。胴部には、外面に平行線が刻まれたタタキ板の痕跡が残っているが、内面の当て具痕跡はほぼ完全にナデ消されている。

146は、陶錘。最大径4.4cm、残存長7.5cmで、軟質の焼成である。直径1.7～2.0cmほどの木の枝などに、粘土を巻き付けて成形したとみられる。

147～150は、甕の頸部ないし口縁部。いずれも外面に櫛描波状文が施されているが、147は施文具の上下の振幅が非常に小さいため、波状文というよりも簾状の文様となっている。

（4）表土・整地土層出土品（第16図151～170・第17図171～173）

灰層の上面より上の層位で出土した遺物を一括した。須恵器・埴輪のほかに、少量の「山茶碗」を含む。

a. 須恵器（第16図151～170）

須恵器としては、蓋杯・高杯・横瓶・提瓶・鉢・甕などの器形がある。

151・152は、蓋杯の蓋。口径は15cmほどで、上層灰層出土の大型品（110～118）と共通する形質的特徴を示す。

153～160は、蓋杯の身。蓋受け部の最大径が15～16cm前後の大型品（153～159）と、13cm前後の小型品（160）があり、前者は上層灰層の大型品（121～129）と形質的に類似するが、後者は上層灰層の小型品（119・120）よりも1・2トレンチ出土の小型の一群（3・4・25）に近似している。

161～164は、高杯の脚部。図示した個体は、いずれも推定三方にスカシ窓が穿孔されているもので、無蓋高杯の脚部かと思われる。上層灰層出土品（134～139）と同様に、下面（内面）に降灰が顕著に認められるので、やはり倒立状態で焼成されていた蓋然性が高い。

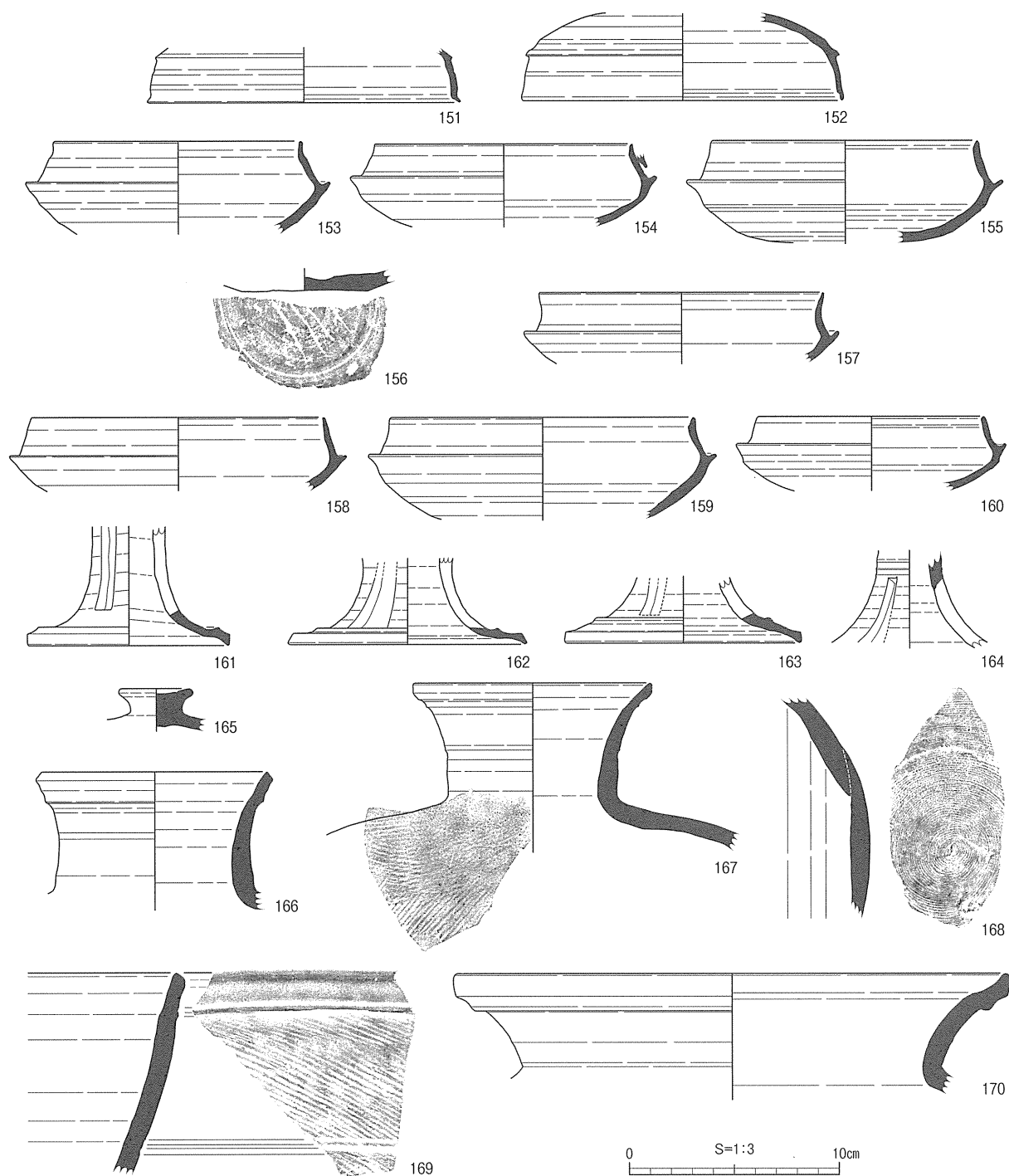
165は、高杯蓋の鈕。やや軟質の焼成である。

166・167は、横瓶。167の胴部外面には、平行線が刻まれたタタキ板の痕跡が明瞭に残っているが、内面の当て具痕跡はナデ消されていてはっきりしない。

168は、提瓶の胴部。円盤閉塞による「風船技法」（北野2001）によって成形されており、外面には同心円状のカキメが認められる。

169は、鉢の口縁部。体部外面には平行線が刻まれたタタキ板の痕跡が残るが、内面の当て具痕跡は丁寧にナデ消されて痕跡をとどめていない。やや軟質の焼成。

170は、甕の頸部。頸部は短く、特に施文は認められない。



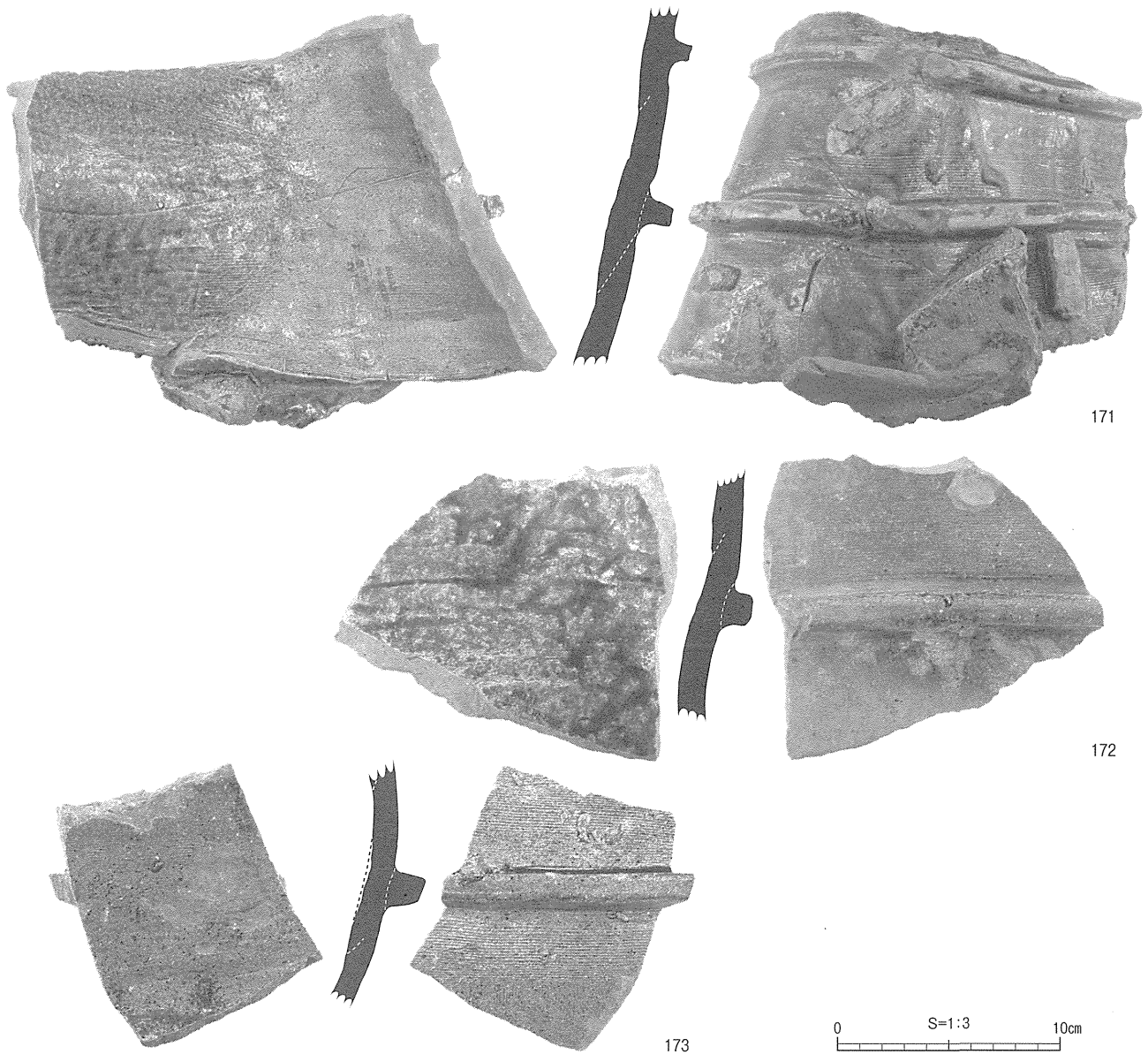
第16図 4トレンチ出土遺物実測図(5) 表土・整地土層 (S=1:3)

b. 埴輪 (第17図171~173)

タガ (凸帯) を有する円筒埴輪片が、4点 (接合後) 出土している。焼け歪みの著しい小片を除く3点を図示した。いずれも硬い須恵器質の焼成で、内外面に降灰が顕著である。基本的に、外面には連続的な横ハケが、内面には断続的な横ハケが認められるが、172の外面タガより下方には及んでおらず、不鮮明ではあるがタタキ板の痕跡とみられる平行線文が認められる。

c. 「山茶碗」

碗の破片がごく少量出土しているが、全形を窺いえない小片であるため、図示しなかった。形質的には、1・2トレンチ出土品と大きな違いを認めない。 (尾野)



第17図 4トレンチ出土遺物実測図 (6) 表土・整地土層 (S=1:3)

第1表 実測図掲載遺物一覧表

番号	実測No.	器形	出土調査区		出土グリッド	出土層位
1	74	杯身(杯H身)	1トレンチ	D区	38-40X 32-34Y	17-20層
2	166	杯身(杯H身)	1トレンチ	D区	38-40X 30-32Y	17-21層
3	9	杯身(杯H身)	1トレンチ	D区	38-40X 32-34Y	17-20層
4	11	杯身(杯H身)	1トレンチ	D区	40-42X 28-30Y	17-20層
5	10	高杯	1トレンチ	D区	38-40X 32-34Y	17-20層
6	86	高杯	1トレンチ	D区	38-40X 32-34Y	17-20層
7	98	高杯	1トレンチ	D区	38-40X 32-34Y	17-20層
8	126	横瓶	1トレンチ	D区	38-40X 30-32Y 38-40X 32-34Y	17-20層
9	67	子持器台	1トレンチ	D区	38-40X 32-34Y	17-20層
10	107	甕	1トレンチ	D区	38-40X 32-34Y	17-20層
11	114	甕	1トレンチ	D区	38-40X 32-34Y	17-20層
12	135	甕	1トレンチ	D区	38-40X 32-34Y	17-20層
13	168	円筒埴輪	1トレンチ	D区	38-40X 32-34Y 40-42X 34-36Y	21層下部 表土層下
14	157	輪花小碗(山茶碗)	1トレンチ	D区	38-40X 30-32Y	表土層
15	152	稜皿(山茶碗)	1トレンチ	D区	38-40X 32-34Y	17-20層
16	2	杯蓋(杯H蓋)	2トレンチ	C区	40-42X 28-30Y	灰層(8層)
17	1	杯蓋(杯H蓋)	2トレンチ	C区	40-42X 28-30Y	灰層(8層)
18	61	杯蓋(杯H蓋)	2トレンチ	C区	40-42X 28-30Y	灰層(8層)
19	12	杯身(杯H身)	2トレンチ	C区	38-40X 30-32Y	灰層(8層)
20	69	杯身(杯H身)	2トレンチ	C区	40-42X 28-30Y	灰層(8層)
21	4	杯身(杯H身)	2トレンチ	C区	40-42X 28-30Y	灰層(8層)
22	5	杯身(杯H身)	2トレンチ	C区	40-42X 28-30Y	灰層(8層)
23	3	杯身(杯H身)	2トレンチ	C区	40-42X 28-30Y 42-44X 28-30Y	表土層
24	6	杯身(杯H身)	2トレンチ	C区	40-42X 28-30Y	サブトレンチ(2~7・9・10層)
25	8	杯身(杯H身)	2トレンチ	C区	42-44X 28-30Y	表土層
26	96	高杯	2トレンチ	C区	42-44X 28-30Y	表土層
27	7	高杯	2トレンチ	C区	40-42X 28-30Y	表土層
28	125	高杯	2トレンチ	C区	42-44X 28-30Y	サブトレンチ(2~7・9・10層)
29	102	横瓶	2トレンチ	C区	40-42X 28-30Y	サブトレンチ(2~7・9・10層)
30	130	広口壺	2トレンチ	C区	40-42X 28-30Y	表土層
31	109	甕	2トレンチ	C区	42-44X 28-30Y	表土層
32	136	甕	2トレンチ	C区	42-44X 28-30Y	表土層
33	118	甕	2トレンチ	C区	40-42X 28-30Y	表土層
34	113	甕	2トレンチ	C区	40-42X 28-30Y	表土層
35	112	甕	2トレンチ	C区	42-44X 28-30Y	サブトレンチ(2~7・9・10層)
36	139	甕	2トレンチ	C区	40-42X 28-30Y	サブトレンチ(2~7・9・10層)
37	141	甕	2トレンチ	C区	40-42X 28-30Y 42-44X 28-30Y	サブトレンチ(2~7・9・10層)
38	169	円筒埴輪	2トレンチ	C区	40-42X 28-30Y	サブトレンチ(2~7・9・10層)
39	170	円筒埴輪	2トレンチ	C区	42-44X 28-30Y	表土層
40	150	碗(山茶碗)	2トレンチ	C区	40-42X 28-30Y	サブトレンチ(2~7・9・10層)
41	153	碗(山茶碗)	2トレンチ	C区	40-42X 28-30Y	サブトレンチ(2~7・9・10層)
42	151	輪花碗(山茶碗)	2トレンチ	C区	40-42X 28-30Y	表土層
43	154	輪花碗(山茶碗)	2トレンチ	C区	40-42X 28-30Y	サブトレンチ(2~7・9・10層)
44	156	小碗(山茶碗)	2トレンチ	C区	40-42X 28-30Y	サブトレンチ(2~7・9・10層)
45	155	壺(山茶碗)	2トレンチ	C区	40-42X 28-30Y	表土層
46	65	杯蓋(杯H蓋)	3トレンチ	B区	44-46X 24-26Y	壁面清掃
47	66	杯蓋(杯H蓋)	3トレンチ	B区	44-46X 24-26Y	壁面清掃
48	58	杯蓋(杯H蓋)	3トレンチ	B区	44-46X 14-16Y	壁面清掃
49	71	杯蓋(杯H蓋)	3トレンチ	B区	44-46X 24-26Y	壁面清掃
50	64	杯蓋(杯H蓋)	3トレンチ	B区	44-46X 26-28Y	表土層
51	57	杯蓋(杯H蓋)	3トレンチ	B区	44-46X 26-28Y	表土層
52	59	杯蓋(杯H蓋)	3トレンチ	B区	44-46X 24-26Y	壁面清掃
53	62	杯蓋(杯H蓋)	3トレンチ	B区	44-46X 20-22Y	壁面清掃
54	63	杯蓋(杯H蓋)	3トレンチ	B区	44-46X 22-24Y	壁面清掃

口径	稜径・蓋受径	高台径	器高	残存率 (径復元根拠)	削り範囲	備考
14.7	16.4			蓋受：60/360		内外面に降灰、蓋熔着
						左回転削り
10.2	11.9			蓋受：55/360	110/119	蓋受に降灰
10.7	12.6			蓋受：60/360		外面に降灰、蓋熔着
		9.6		脚端：130/360		左回転削り
		12.5		脚端：75/360		左回転削り、内面に降灰顕著
		13.0		脚端：60/360		右回転水挽、下面に降灰
12.5				口縁：80/360		外面に薄く降灰
11.6	12.0			稜：70/360	105/116	右回転削り
						頸部に櫛描波状文、内面に降灰
34.0				口縁：30/360		頸部に櫛描波状文、内面に降灰
25.9				口縁：55/360		頸部に櫛描波状文、内外面に降灰
35.6						やや生焼きみ
11.0		6.4	3.2	口縁：70/360		右回転水挽、見込みに重ね焼痕跡
9.8		5.3	2.9	高台：355/360		右回転水挽、見込みに重ね焼痕跡
14.5	14.7			稜：100/360	105/147	左回転削り、内外面に薄く降灰
14.6	14.9			稜：60/360	112/149	外面に降灰顕著
14.8	15.0		4.1	稜：65/360	120/150	左回転削り
12.6	14.9			稜：115/360	110/149	
13.3	15.3			蓋受：120/360		
13.2	15.4			蓋受：95/360	124/154	左回転削り
13.7	15.4			蓋受：60/360	134/154	左回転削り、外面に降灰、蓋熔融
13.5	15.3			蓋受：95/360	143/153	右回転削り、外面に薄く降灰
14.0	15.4			蓋受：90/360	114/154	外面に降灰、蓋熔融
10.5	12.1			蓋受75/360	111/121	左回転削り、内面に降灰
		14.0		脚端：45/360		左回転削り、下面に降灰
		8.7		脚端：130/360		右回転水挽
		14.8		脚端：45/360		右回転水挽、内外面に降灰顕著
11.8				口縁：30/360		内外面に降灰顕著
16.9				稜：50/360		やや生焼きみ
						頸部に櫛描波状文、内外面に降灰
20.5				口縁：50/360		体部外面に平行タタキ、生焼
						内面に降灰
						頸部に櫛描波状文、内面に降灰
26.6				口縁：40/360		頸部に櫛描波状文、内面に降灰顕著
47.3						頸部に櫛描波状文、内面に薄く降灰
54.8				口縁：50/360		頸部に櫛描波状文、内面に降灰
						内面に降灰顕著
						内外面に降灰顕著
16.1		7.0	6.5	高台：360/360		右回転水挽、右回転糸切、見込みに重ね焼痕跡
16.6		7.0	5.9	高台：320/360		右回転水挽、右回転糸切、高台に初殻痕跡
16.3		7.7	5.4	高台：360/360		右回転水挽、右回転糸切、高台に初殻痕跡
16.8		8.1	5.4	高台：360/360		右回転水挽、右回転糸切、見込みに重ね焼痕跡
10.0		5.3	3.6	高台：115/360		右回転水挽、重ね焼最上段
		11.0		底：70/360		見込みに降灰
12.2	11.7			稜：95/360	100/122	左回転削り
14.7	14.6			稜：80/360	118/147	右回転削りか、外面に降灰
14.8	14.6			稜：90/360	125/148	外面に降灰
14.8	14.6			稜：60/360	114/146	外面に降灰顕著
14.6	14.8		4.0	稜：90/360	104/146	左回転削り
15.0	14.2			口縁：70/360	114/150	外面に降灰
15.0	15.0			稜：65/360	138/150	上面に窯ガラ付着
15.0	15.2			稜：130/360	124/150	左回転削り
15.3	15.4			稜：95/360	128/153	左回転削り、外面に降灰

番号	実測No.	器形	出土調査区		出土グリッド	出土層位
55	79	杯蓋(杯H蓋)	3トレンチ	B区	44-46X 24-26Y	壁面清掃
56	60	杯蓋(杯H蓋)	3トレンチ	B区	44-46X 22-24Y	壁面清掃
57	77	杯身(杯H身)	3トレンチ	B区	44-46X 22-24Y	表土層
58	78	杯身(杯H身)	3トレンチ	B区	44-46X 26-28Y	表土層
59	70	杯身(杯H身)	3トレンチ	B区	44-46X 20-22Y	表土層
60	76	杯身(杯H身)	3トレンチ	B区	44-46X 22-24Y	壁面清掃
61	75	杯身(杯H身)	3トレンチ	B区	44-46X 24-26Y	壁面清掃
62	73	杯身(杯H身)	3トレンチ	B区	44-46X 22-24Y	壁面清掃
63	80	杯身(杯H身)	3トレンチ	B区	44-46X 22-24Y	表土層
64	68	杯身(杯H身)	3トレンチ	B区	42-44X 24-26Y	表土層
65	72	杯身(杯H身)	3トレンチ	B区	42-44X 20-22Y	表土層
66	92	高杯	3トレンチ	B区	44-46X 24-26Y	壁面清掃
67	88	高杯	3トレンチ	B区	44-46X 22-24Y	壁面清掃
68	89	高杯	3トレンチ	B区	44-46X 24-26Y	壁面清掃
69	90	高杯	3トレンチ	B区	44-46X 22-24Y	表土層
70	87	高杯	3トレンチ	B区	44-46X 22-24Y	壁面清掃
71	91	高杯	3トレンチ	B区	44-46X 16-18Y	壁面清掃
72	95	高杯蓋	3トレンチ	B区	44-46X 20-22Y	壁面清掃
73	83	高杯蓋	3トレンチ	B区	44-46X 26-28Y	壁面清掃
74	138	壺もしくは甗	3トレンチ	B区	44-46X 24-26Y	壁面清掃
75	133	鉢	3トレンチ	B区	44-46X 14-16Y	壁面清掃
76	103	杯蓋(杯H蓋)	4トレンチ	A区	26-28X 10-12Y	下層灰層(20層)
77	19	杯蓋(杯H蓋)	4トレンチ	A区	24-26X 10-12Y	下層灰層(20層)
78	162	杯蓋(杯H蓋)	4トレンチ	A区	32-34X 10-12Y	下層灰層(19層)
79	53	杯身(杯H身)	4トレンチ	A区	26-28X 10-12Y	下層灰層(20層)
80	14	杯身(杯H身)	4トレンチ	A区	32-34X 10-12Y	下層灰層(19層)
81	160	杯身(杯H身)	4トレンチ	A区	32-34X 10-12Y	下層灰層(19層)
82	158	杯身(杯H身)	4トレンチ	A区	32-34X 10-12Y	下層灰層(19層)
83	165	杯身(杯H身)	4トレンチ	A区	32-34X 10-12Y	下層灰層(19層)
84	159	杯身(杯H身)	4トレンチ	A区	32-34X 10-12Y	下層灰層(19層)
85	105	杯身(杯H身)	4トレンチ	A区	26-28X 10-12Y	下層灰層(20層)
86	36	高杯	4トレンチ	A区	32-34X 10-12Y	下層灰層(19層)
87	46	高杯	4トレンチ	A区	32-34X 10-12Y	下層灰層(19層)
88	85	高杯	4トレンチ	A区	32-34X 10-12Y	下層灰層(19層)
89	100	提瓶	4トレンチ	A区	32-34X 10-12Y	下層灰層(19層)
90	140	提瓶	4トレンチ	A区	32-34X 10-12Y	下層灰層(19層)
91	143	提瓶	4トレンチ	A区	26-28X 10-12Y	下層灰層(20層)
92	99	広口壺	4トレンチ	A区	32-34X 10-12Y	下層灰層(19層)
93	111	広口壺	4トレンチ	A区	26-28X 10-12Y	下層灰層(20層)
94	144	甗もしくは鉢	4トレンチ	A区	32-34X 10-12Y	下層灰層(19層)
95	147	高杯形器台	4トレンチ	A区	26-28X 10-12Y	下層灰層(20層)
96	148	筒形器台	4トレンチ	A区	32-34X 10-12Y	下層灰層(19層)
97	123	甗	4トレンチ	A区	24-26X 10-12Y	下層灰層(20層)
98	110	甗	4トレンチ	A区	32-34X 10-12Y	下層灰層(19層)
99	149	焼台	4トレンチ	A区	26-28X 10-12Y	下層灰層(20層)
100	161	杯蓋(杯H蓋)	4トレンチ	A区	30-32X 10-12Y	間層(16-18層)
101	13	杯身(杯H身)	4トレンチ	A区	30-32X 10-12Y	間層(16-18層)
102	17	有蓋高杯	4トレンチ	A区	30-32X 10-12Y	間層(16-18層)
103	82	高杯	4トレンチ	A区	30-32X 10-12Y	間層(16-18層)
104	40	高杯	4トレンチ	A区	30-32X 10-12Y	間層(16-18層)
105	128	横瓶	4トレンチ	A区	30-32X 10-12Y	間層(16-18層)
106	106	甗	4トレンチ	A区	30-32X 10-12Y	間層(16-18層)
107	108	甗	4トレンチ	A区	30-32X 10-12Y	間層(16-18層)
108	34	杯蓋(杯H蓋)	4トレンチ	A区	24-26X 10-12Y	上層灰層(13-15層)
109	26	杯蓋(杯H蓋)	4トレンチ	A区	32-34X 10-12Y	上層灰層(13-15層)
110	21	杯蓋(杯H蓋)	4トレンチ	A区	34-36X 10-12Y	上層灰層(13-15層)
111	20	杯蓋(杯H蓋)	4トレンチ	A区	34-36X 10-12Y	上層灰層(13-15層)
112	18	杯蓋(杯H蓋)	4トレンチ	A区	34-36X 10-12Y	上層灰層(13-15層)
113	25	杯蓋(杯H蓋)	4トレンチ	A区	32-34X 10-12Y	上層灰層(13-15層)
114	23	杯蓋(杯H蓋)	4トレンチ	A区	34-36X 10-12Y	上層灰層(13-15層)

口径	稜径・蓋受径	高台径	器高	残存率 (径復元根拠)	削り範囲	備 考
15.6	15.3			稜：60/360	115/153	外面に降灰
15.9	15.4			稜：55/360	120/159	左回転削り
12.9	14.8			蓋受：80/360	115/148	左回転削り、外面に降灰顕著、蓋熔着
13.6	15.4			蓋受：70/360	115/154	左回転削り、蓋熔着
13.4	15.5			蓋受：90/360	104/155	左回転削り、やや生焼きみ
13.6	15.6			蓋受：65/360		外面に降灰
13.6	15.8			蓋受：85/360		
13.9	15.9			蓋受：70/360	119/159	外面に降灰、蓋熔着
14.0	16.4			蓋受：55/360	128/164	右回転削り
15.0	16.6			蓋受：80/360		左回転削り、外面に降灰、蓋熔着
14.5	16.9			蓋受：65/360		
		10.8		脚端：50/360		左回転削り
		10.5		脚端：170/360		内面に薄く降灰
		8.5		脚端：120/360		左回転削り
		10.6		脚端：90/360		外面に降灰顕著
		9.9		脚端：70/360		左回転削り、外面に降灰
		10.6		脚端：70/360		右回転水挽、内面に降灰
				稜：60/360	101/ 94/	左回転削り 左回転削り、外面に降灰
				胴：60/360		胴部に櫛描波状文、左回転削り、外面に降灰
						体部外面に平行タタキ、生焼きみ
11.2	11.4			口縁：60/360		
12.6	12.9			口縁：85/360	92/129	左回転削り、外面に降灰
	14.7			稜：60/360		左回転削り、内面に薄く降灰
9.5	11.3			蓋受：73/360	86/113	左回転削り、外面に薄く降灰
9.8	11.2		4.0	蓋受：125/360	73/112	左回転削り、外面に降灰
	11.7			蓋受：85/360		左回転削り
	12.2			蓋受：70/360		左回転削り、外面に降灰
						右回転削り
	12.6			蓋受：65/360		左回転削り、蓋受に降灰、蓋熔着
	16.5			蓋受：60/360	138/165	外面に降灰顕著
		8.9		脚端：185/360		左回転水挽、内外面に降灰顕著
		8.5		脚端：125/360		内外面に降灰
		8.6		脚端：75/360		右回転水挽、下面に降灰
11.2				口縁：265/360		左回転水挽、内面に降灰
						把手部分
						把手部分、外面に降灰
13.5				口縁：150/360		外面に降灰
16.8						頸部に櫛描波状文、内外面・割れ口に降灰
						把手部分、生焼
						外面に降灰顕著
		20.0		稜：330/360		脚部に櫛描波状文、外面に降灰
27.0				口縁：40/360		頸部に櫛描波状文
24.5				口縁：50/360		頸部に櫛描波状文、外面に薄く降灰
						生焼
	11.3			稜：190/360		外面に降灰
10.9	12.9		5.1	蓋受：200/360	88/129	左回転削り、外面に降灰、蓋熔着
	12.7	8.8		脚端：360/360	116/127	左回転水挽、左回転削り
		8.4		脚端：115/360	94/	右回転水挽、内外面に降灰
		9.8		脚端：145/360		右回転水挽
10.9				口縁：100/360		内外面に降灰
						頸部に櫛描波状文
						頸部に櫛描波状文、やや生焼きみ
11.5	11.8			稜：95/360	89/118	外面に降灰
12.5	12.8			稜：85/360	105/128	左回転削り
13.6	13.6			稜：90/360	118/136	左回転削り、外面に降灰顕著
13.8	13.8			稜：70/360		外面に降灰
14.2	13.8			稜：105/360		
14.2	13.9			稜：75/360		外面に降灰顕著
14.8	14.2			稜：140/360	112/142	左回転削り、外面に降灰

番号	実測No.	器形	出土調査区		出土グリッド	出土層位
115	54	杯蓋(杯H蓋)	4トレンチ	A区	34-36X 10-12Y	上層灰層(13-15層)
116	27	杯蓋(杯H蓋)	4トレンチ	A区	32-34X 10-12Y	上層灰層(13-15層)
117	24	杯蓋(杯H蓋)	4トレンチ	A区	34-36X 10-12Y	上層灰層(13-15層)
118	167	杯蓋(杯H蓋)	4トレンチ	A区	32-34X 10-12Y	上層灰層(13-15層)
119	15	杯身(杯H身)	4トレンチ	A区	32-34X 10-12Y	上層灰層(13-15層)
120	16	杯身(杯H身)	4トレンチ	A区	32-34X 10-12Y	上層灰層(13-15層)
121	51	杯身(杯H身)	4トレンチ	A区	32-34X 10-12Y	上層灰層(13-15層)
122	49	杯身(杯H身)	4トレンチ	A区	32-34X 10-12Y	上層灰層(13-15層)
123	30	杯身(杯H身)	4トレンチ	A区	34-36X 10-12Y	上層灰層(13-15層)
124	47	杯身(杯H身)	4トレンチ	A区	34-36X 10-12Y	上層灰層(13-15層)
125	28	杯身(杯H身)	4トレンチ	A区	32-34X 10-12Y	上層灰層(13-15層)
126	44	杯身(杯H身)	4トレンチ	A区	34-36X 10-12Y	上層灰層(13-15層)
127	29	杯身(杯H身)	4トレンチ	A区	34-36X 10-12Y	上層灰層(13-15層)
128	50	杯身(杯H身)	4トレンチ	A区	34-36X 10-12Y	上層灰層(13-15層)
129	48	杯身(杯H身)	4トレンチ	A区	34-36X 10-12Y	上層灰層(13-15層)
130	101	高杯	4トレンチ	A区	32-34X 10-12Y	上層灰層(13-15層)
131	127	高杯	4トレンチ	A区	34-36X 10-12Y	上層灰層(13-15層)
132	81	高杯	4トレンチ	A区	34-36X 10-12Y	上層灰層(13-15層)
133	42	高杯	4トレンチ	A区	32-34X 10-12Y	上層灰層(13-15層)
134	39	高杯	4トレンチ	A区	32-34X 10-12Y	上層灰層(13-15層)
135	41	高杯	4トレンチ	A区	32-34X 10-12Y	上層灰層(13-15層)
136	94	高杯	4トレンチ	A区	34-36X 10-12Y	上層灰層(13-15層)
137	122	高杯	4トレンチ	A区	34-36X 10-12Y	上層灰層(13-15層)
138	121	高杯	4トレンチ	A区	34-36X 10-12Y	上層灰層(13-15層)
139	146	高杯	4トレンチ	A区	32-34X 10-12Y	上層灰層(13-15層)
140	37	高杯蓋	4トレンチ	A区	32-34X 10-12Y	上層灰層(13-15層)
141	163	高杯蓋	4トレンチ	A区	34-36X 10-12Y	上層灰層(13-15層)
142	55	子持器台	4トレンチ	A区	32-34X 10-12Y	上層灰層(13-15層)
143	45	子持器台か	4トレンチ	A区	34-36X 10-12Y	上層灰層(13-15層)
144	38	壺	4トレンチ	A区	32-34X 10-12Y	上層灰層(13-15層)
145	134	広口壺	4トレンチ	A区	34-36X 10-12Y	上層灰層(13-15層)
146	145	陶錘	4トレンチ	A区	34-36X 10-12Y	上層灰層(13-15層)
147	116	甕	4トレンチ	A区	34-36X 10-12Y	上層灰層(13-15層)
148	120	甕	4トレンチ	A区	32-34X 10-12Y	上層灰層(13-15層)
149	129	甕	4トレンチ	A区	30-32X 10-12Y 32-34X 10-12Y	上層灰層(13-15層)
150	142	甕	4トレンチ	A区	34-36X 10-12Y	上層灰層(13-15層)
151	35	杯蓋(杯H蓋)	4トレンチ	A区	32-34X 10-12Y	表土・整地土層
152	22	杯蓋(杯H蓋)	4トレンチ	A区	32-34X 10-12Y	表土・整地土層
153	31	杯身(杯H身)	4トレンチ	A区	32-34X 10-12Y	表土・整地土層
154	52	杯身(杯H身)	4トレンチ	A区	34-36X 10-12Y	表土・整地土層
155	43	杯身(杯H身)	4トレンチ	A区	22-24X 10-12Y	表土・整地土層
156	164	杯身(杯H身)	4トレンチ	A区	24-26X 10-12Y	表土・整地土層
157	104	杯身(杯H身)	4トレンチ	A区	22-24X 10-12Y	表土・整地土層
158	33	杯身(杯H身)	4トレンチ	A区	32-34X 10-12Y	表土・整地土層
159	32	杯身(杯H身)	4トレンチ	A区	36-38X 10-12Y	表土・整地土層
160	131	杯身(杯H身)	4トレンチ	A区	30-32X 10-12Y	表土・整地土層
161	56	高杯	4トレンチ	A区	32-34X 10-12Y	表土・整地土層
162	124	高杯	4トレンチ	A区	24-26X 10-12Y	表土・整地土層
163	97	高杯	4トレンチ	A区	34-36X 10-12Y	表土・整地土層
164	93	高杯	4トレンチ	A区	34-36X 10-12Y	表土・整地土層
165	84	高杯蓋	4トレンチ	A区	24-26X 10-12Y	表土・整地土層
166	137	横瓶	4トレンチ	A区	30-32X 10-12Y	表土・整地土層
167	117	横瓶	4トレンチ	A区	24-26X 10-12Y	表土・整地土層
168	132	提瓶	4トレンチ	A区	36-38X 10-12Y	表土・整地土層
169	115	鉢	4トレンチ	A区	30-32X 8-10Y	表土・整地土層
170	119	甕	4トレンチ	A区	28-30X 10-12Y	表土・整地土層
171	173	円筒埴輪	4トレンチ	A区	34-36X 10-12Y	表土・整地土層
172	171	円筒埴輪	4トレンチ	A区	34-36X 10-12Y	表土・整地土層
173	172	円筒埴輪	4トレンチ	A区	36-38X 10-12Y	表土・整地土層

口径	稜径・蓋受径	高台径	器高	残存率 (径復元根拠)	削り範囲	備考
14.9	14.8			稜：90/360	105/149	外面に降灰
15.3	14.9			稜：115/360	118/149	外面に降灰顕著
15.8	15.1			稜：75/360	124/151	外面に降灰顕著
						右回転削り
9.8	11.6			蓋受：90/360	100-116	左回転削り、蓋受に降灰、蓋熔着
11.0	12.5			蓋受：60/360	110/125	左回転削り
11.5	14.6			蓋受：70/360		外面に降灰
12.8	14.8			蓋受：70/360	124/148	左回転削り、内面に降灰
13.1	15.0		4.7	蓋受：125/360	94/150	右回転削り、外面に降灰
12.9	15.3			蓋受：65/360	139/153	
13.5	15.3			蓋受：75/360	123/153	外面に降灰顕著
13.5	15.3			蓋受：65/360	99/153	左回転削り、外面に降灰
13.1	15.4			蓋受：105/360	114/154	外面に降灰顕著
13.3	15.4			蓋受：65/360	116/154	左回転削り、蓋受に降灰、蓋熔着
13.8	16.0			蓋受：60/360		外面に降灰
13.9				稜：50/360		内外面に降灰
16.7				口縁：70/360		杯部に櫛描波状文、左回転削り
		8.7		脚端：90/360		右回転水挽、上面に降灰
		7.5		脚端：330/360		右回転水挽、下面に薄く降灰
		7.4		脚端：220/360		左回転水挽、下面に降灰
		10.7		脚端：110/360		左回転水挽、下面に降灰
		11.0		脚端：105/360		左回転水挽、下面に降灰
						外面に降灰
		12.8		稜：120/360		生焼
						左回転削り
	9.0					外面に降灰
10.2	10.3			稜：245/360	79/102	左回転削り、やや生焼きみ
13.9	12.8			稜：80/360	108/128	左回転削り、外面に降灰顕著
8.8				稜：120/360		
15.1				口縁：60/360		体部外面に平行タタキ
						生焼
21.0				口縁：45/360		頸部に櫛描波状文、内外面に降灰顕著
21.5				口縁：55/360		頸部に櫛描波状文
26.0				口縁：105/360		頸部に櫛描波状文、やや生焼きみ
47.2				口縁：65/360		頸部に櫛描波状文
14.9	14.1			口縁：60/360		外面に降灰
15.3	14.8			稜：90/360	115/148	右回転削り、外面に降灰
11.9	14.5			蓋受：100/360	113/145	左回転削りか、外面に降灰、蓋熔着
12.3	14.6			蓋受：105/360	107/146	外面に降灰顕著、蓋熔着
12.8	15.0			蓋受：60/360	132/150	左回転削り、外面に降灰
						左回転削り
13.6	15.0			蓋受：65/360		
14.1	16.0			蓋受：90/360	135/160	左回転削り
14.6	16.5			蓋受：80/360	149/165	左回転削り、外面に降灰
10.9	12.9			蓋受：65/360		蓋受に蓋熔着痕跡
		9.7		脚端：80/360		内外面に降灰顕著
		11.4		稜：65/360		下面に降灰
		11.3		脚端：70/360		下面に降灰
						左回転削り、内面に降灰
						やや生焼きみ
11.3				口縁：135/360		
11.4				頸：180/360		体部外面に平行タタキ、外面に降灰
						カキメ左回転施紋
						体部外面に平行タタキ、やや生焼きみ
26.5				口縁：50/360		内面に降灰
						内外面・割れ口に降灰顕著
						内面に降灰顕著
						内外面に降灰

Ⅶ 考 察 —H-61号窯の調査をめぐる諸問題—

H-61号窯出土品は、1986年にその内容が広く公表（斎藤1986）されて以来、6世紀の猿投窯を代表する資料として、東海地方の古墳時代須恵器研究の上で、常に参照される存在であった。遺跡名である同窯の名を冠して、「H-61号窯式」が設定されていることが端的に示すように、名実共に編年上の基準資料（標式資料）として捉えられている。しかし、その実体は名古屋大学の施設（理科系食堂）建設によって露呈した灰原からの採集品に過ぎず、この点で不安定要素を孕む資料であったことは否定できない。

H-61号窯が属する東山地区は、約20km四方もの広がりをもつ猿投窯の中でも、いち早く宅地開発の波に洗われた地区であり、多くの窯跡が記録保存の措置を講ぜられることもなく消えてしまった。文化財保護行政の体制整備以前に進行したことであるため、致し方ないことではあるのだが、東山地区に偏在していた古墳時代の窯跡については、結果的に本格的な発掘調査が行われることが極めて稀であった。それゆえ、これまでは地表面採集資料といえども必要に応じて基準資料とせざるをえなかったし、その一方で本格的な窯跡の発掘調査が待たれていたわけでもある。

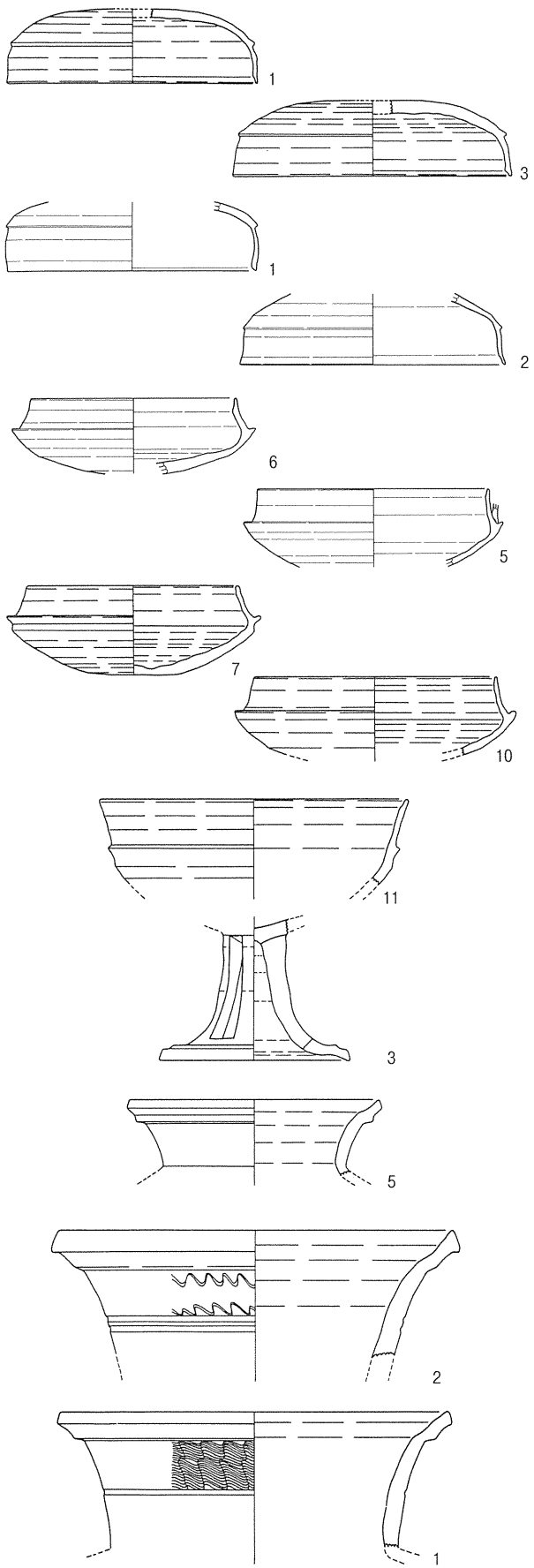
本書で報告しているH-61号窯の発掘調査は、こうした状況の下で実施されたものであり、残念ながら窯体の検出には至らなかったものの、灰層の堆積状況を確認するなど、一定の成果を挙げることができた。そこで、以下では今次調査の成果に基づいて、改めて編年上の標式遺跡たるH-61号窯について検討を加え、関連する若干の問題に論及することとしたい。

他の検討に先立って、まずは出土遺物のうち、どれがH-61号窯の操業に伴う焼成品と考えられるのかを見極めることから始めたい。なぜなら、今次調査出土品の中には、いわゆる「山茶碗」をはじめとして、その形質から明らかに別の窯跡に由来すると判断される遺物が少なからず含まれており、全てを一括してH-61号窯の遺物と見なすことには、少なからず問題があるからである。

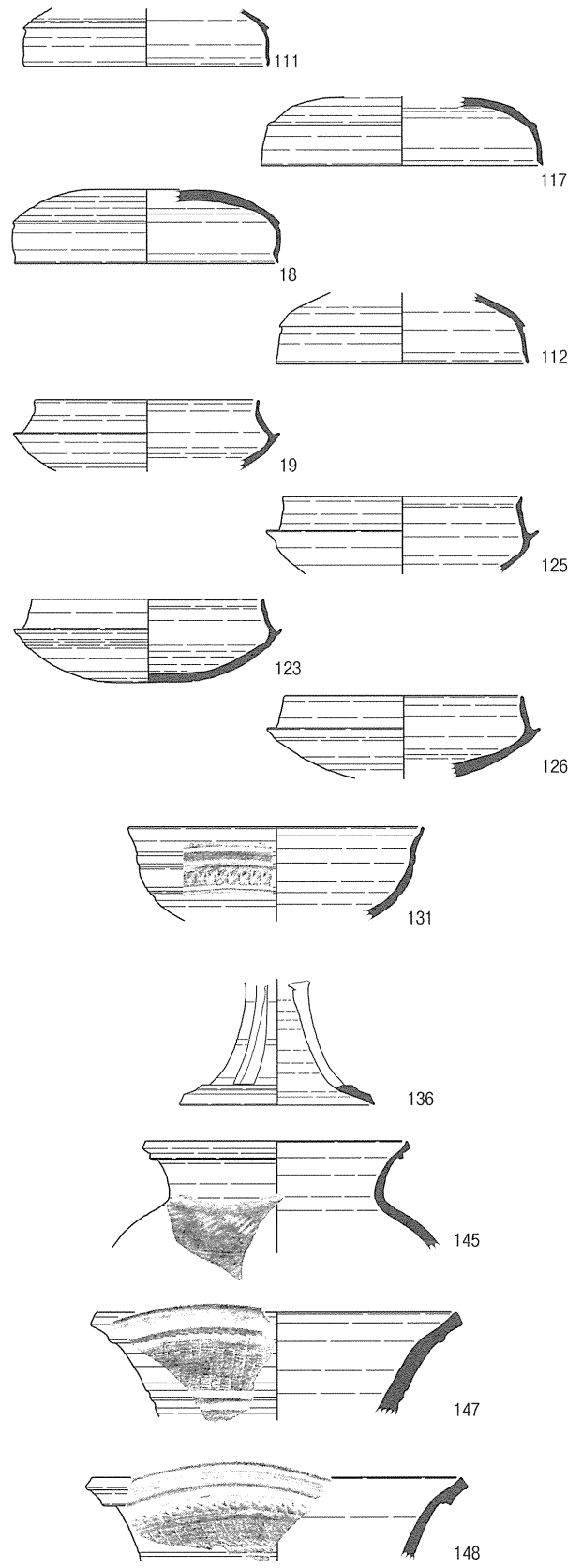
これまでにH-61号窯出土品として紹介されてきた遺物は、いずれも名古屋大学旧理系中華食堂（第1理科系食堂）の北西側崖面に露出していた灰層やその付近から採集されたもので、採集地点はまさに今次調査の3トレンチに相当する。したがって、このトレンチで確認された灰層（第9図5層）がH-61号窯の灰層に他ならないのだが、3トレンチの調査は土層断面観察のための崖面清掃にとどまったため、一部の表土層出土品を除いて帰属層位を特定できる遺物がない。

しかし、2トレンチで検出された灰層（第6図8層）や4トレンチで検出された上層灰層（第11図13～15層）が、3トレンチの灰層の延長部分に当たることは間違いなく、基本的にこれらの層からの出土品（16～22・108～150）をH-61号窯の遺物と見なしても、大きな問題はないだろう。これは、過去にH-61号窯の出土品として紹介されてきた遺物との間に、極めて高い形質的共通性が認められることとも矛盾しない（第18図）。

ただ、量的にはごく少ないながらも、108・119・120など4トレンチ上層灰層出土品の中に、



過去の採集品



2トレンチ灰層・4トレンチ上層灰層出土品

0 S=1:4 10cm

第18図 H-61号窯出土品比較図 (斎藤1989・尾野1993より) (S=1:4)

最大径が12cmほどしかない小型の蓋杯が含まれていることは、これまで紹介されてきたH-61号窯出土品との顕著な相違と言えなくもない。もっとも、これら小型蓋杯の出土グリッドが、4トレンチの中でも下層灰層や間層との重複が認められる西側に集中していることを考えるならば、本来下の層（下層灰層・間層）に含まれていた遺物が、調査時もしくは上層灰層堆積の過程で混入したものではないかとも考えられよう。小型蓋杯（108・119・120）の形状が、下層灰層出土品（79）や間層出土品（100）と強い形態的共通性を示していることが、こうした考え方を裏付ける。

では、4トレンチの間層や下層灰層から出土した遺物については、どのように評価すべきであろうか。層位的な上下関係から、これらが上層灰層出土品よりも古い時期のものであることは明らかだが、これをH-61号窯の操業期間内の新旧と見なすのか、先行する別個の遺跡（窯跡）に由来するものとするのか、とりあえず選択肢は二つある。

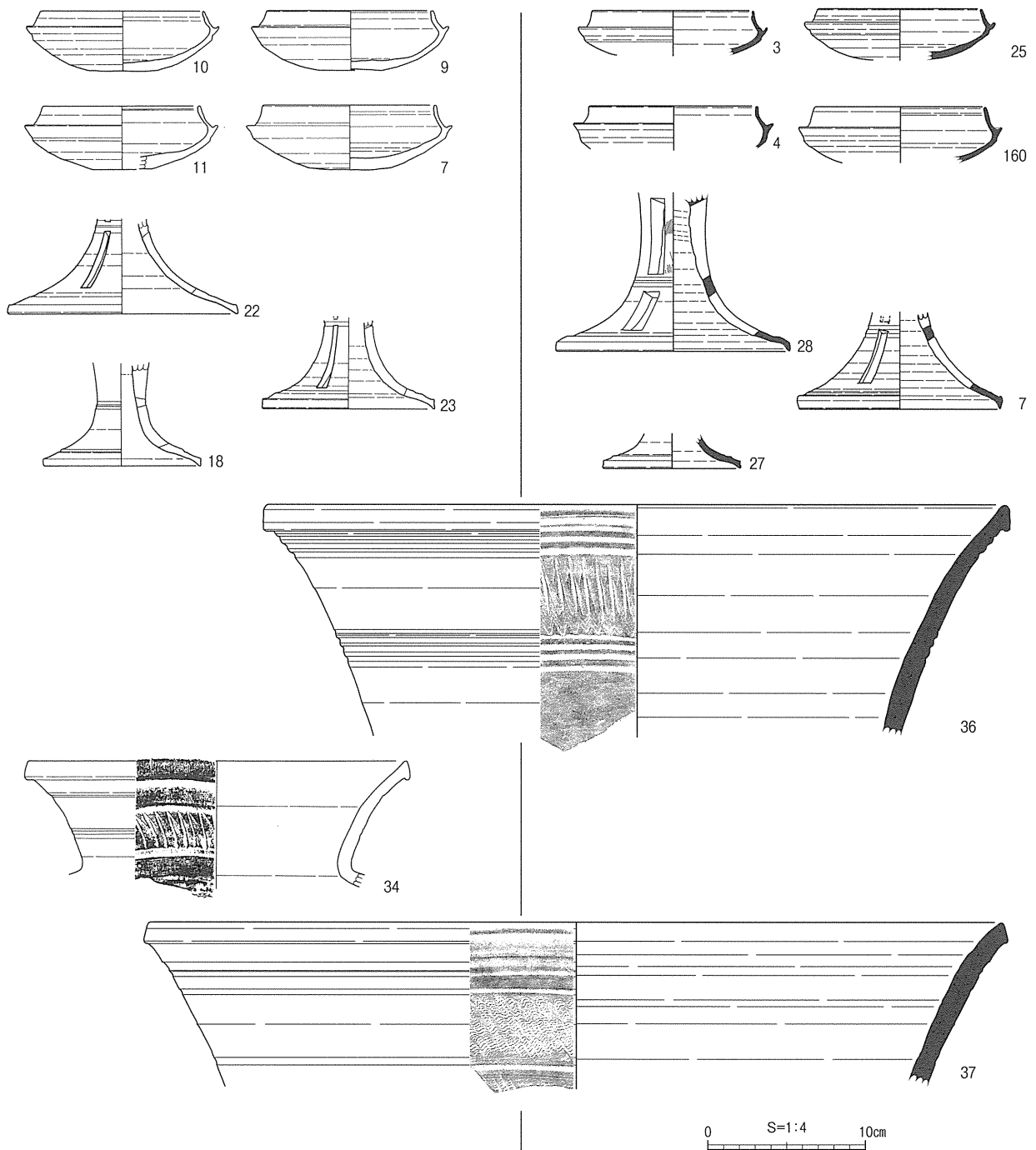
しかし、下層灰層の分布領域は明らかに西側に偏っていて、上層灰層とは東端の一部でしか重複しないという分布のあり方を考慮するならば、下層灰層はH-61号窯とは別個の窯の操業に伴うものとするのが自然だろう。上下の灰層の間に検出された間層も、その土質からみて、新たに窯を築くために地山を掘り込んだ際の残土ではないかと思われる。

つまり、H-61号窯の西側には時期的に先行する別の窯が存在していたと考えられ、そうした観点から改めて遺跡分布図を参照してみると、H-61号窯の西側にさほど距離を隔てずに古墳時代の窯、H-39号窯が登録されていることが判る（第2図 5-74）。したがって、4トレンチ下層灰層はこの窯（H-39号窯）によって形成されたと考えるのが妥当で、間層がH-61号窯構築に伴う地山掘り込みの残土であるならば、その中に含まれる遺物はH-61号窯で焼かれたものではなく、H-39号窯の焼成品と見なされるべきかと思われる。

以上の検討結果をまとめると、4トレンチ下層灰層・間層出土品がH-39号窯焼成品と推定されるのに対して、4トレンチ上層灰層・2トレンチ灰層出土品については、H-61号窯焼成品が多くを占めてはいるものの、H-39号窯焼成品の一部混入が考えられる。そこで、形態的類似性を手がかりに、4トレンチ上層灰層の中に混入したH-39号窯焼成品を捜し求めるならば、さしずめ108・119・120・132・133・149などがその候補として挙げられよう。

このように、今次調査で検出された灰層は、異なる2基の須恵器窯によって形成されたものと考えられるのだが、「山茶碗」の存在が物語っているように、表土層や整地土層からの出土品の中には、さらに別の窯の遺物が混じっていることが明らかである。そこで、全トレンチの表土層・整地土層出土品を概観してみると、大半が2・4トレンチ灰層出土品と共通した特徴を示しているものの、「山茶碗」以外にも、異質な須恵器の一群が存在することに気付く。

具体的には3・4・25・160など、蓋受け部径12cm前後の小型杯身の一群が判りやすい事例で、H-39号窯焼成品と推定される小型杯身（79～84・101・119・120）と較べると器高が低く、概して扁平な形状を呈することが大きな特徴である。この一群については、過去にH-61号窯出土品として紹介されてきた須恵器の中に類品を見いだしがたい一方で、年代的に後出とされるH-



H-44号窯出土品

推定H-61B号窯焼成品

第19図 推定H-61B号窯焼成品・H-44号窯出土品比較図（尾野1993より）（S=1:4）

44号窯出土品との類似性の高さを指摘できるから（第19図）、H-61号窯よりも新しい時期の須恵器窯の存在を示すものと考えられよう。そうした観点に基づき、改めて全トレンチの表土層・整地土層出土品を通覧してみると、扁平な小型杯身以外にも、二段三方にスカシ窓が穿たれた長い高杯の脚部（7・28）や、脚端部の縁帯の上に巡らされた凸帯が不明瞭な小型の高杯脚部（27）、口縁端部の縁帯下に明瞭な凸帯をもたない甕の頸部（36・37）など、H-44号窯出土品の類品が少なからず見いだされる。

非図化分も含めて、H-44号窯出土品類品の出土場所を検索してみると、圧倒的に1～3トレンチに集中しており、4トレンチからの出土はほとんどないことが判る。したがって、H-44号窯出土品の類品を焼成していたであろう窯は、H-61号窯のごく近く、あえて言うなら東隣に所在していたのではないかと考えられるが、該当する地点に須恵器窯の存在は知られていないので(第2図)、未知の窯ということになる。ただし、H-61号窯とほぼ同時期の上向イ田3号窯(愛知県豊田市)や下原2号窯(愛知県春日井市)などでは、ほぼ同一地点に後世(7世紀)に窯が築き直されているから(森ほか2009)、H-61号窯についても同様に考えることができるかもしれない。窯体を確認していない現状では、H-44号窯出土品の類品焼成窯を築き直されたH-61号窯だと決め付けることはできないが、そうであるかもしれないことを考慮して、ここでは行論の都合上、暫定的にこの未知の窯をH-61B号窯と呼称することとしよう。

いわゆる「山茶碗」は、4トレンチからもごく僅かに出土しているが、1・2・3トレンチに偏在していることは明らかで、特に出土量が目立つ2トレンチのすぐ脇には、H-G-28号窯が登録されている(第2図5-76)。したがって、この窯で焼かれたものとみて、まず間違いはない。

このように、今次調査での出土品は、年代順に古い方から、H-39号窯・H-61号窯・H-61B号窯・H-G-28号窯という4基の窯跡に由来する遺物と考えられた。次に、各窯の操業時期(編年的位置)について考えてみよう。

前述のように、4トレンチ下層灰層・間層出土品のほか、108・119・120・132・133・149などがH-39号窯の焼成品と推定されたわけだが、これまでに公表されている猿投窯出土品と対比してみると、小型の蓋杯と大型の蓋杯が共存している点など、H-10号窯出土品との共通性が高いと思われる。H-10号窯は、筆者編年案(尾野1997・2000)のⅡ期新段階に位置付けられる窯である。

筆者編年案のⅢ期古段階に位置付けうるH-61号窯は、既に編年上の基準資料(標式資料)として周知の存在であるから、ことさらに相対編年上への位置付けを論ずる必要はないだろう。ただし、今次調査によって資料が充実すると共に、新たな知見がもたらされたことは特筆しておきたい。とりわけ重要なのは、4トレンチの上層灰層から二段のスカシ窓をもつ高杯脚部が出土したことであるが、その意義については、陶邑古窯跡群(陶邑窯)との並行関係の問題と併せて後述する。

H-61B号窯の焼成にかかると考えられる須恵器は、既に述べたようにH-61号窯よりも新しく位置付けられるH-44号窯出土品との類似性が高く、筆者編年案ではⅢ期中～新段階の過渡的様相と評価できる。Ⅲ期中段階については、未だ直接的な暦年代の推定根拠を見いだしていないが、H-44号窯と同時期と考えられる猿投窯系須恵器杯身が飛鳥の川原寺下層SD02から出土していること(西口1993)が参考となる。猿投窯系須恵器杯身に伴って出土した土器群の様相は、舒明十三年(641)造営開始とされる山田寺の整地層や下層遺構(SD619)出土土器よりも僅かに古相を示すとされている(花谷1992)から、7世紀前半でも第1四半期に近い年代を想定できよう。これは、後続するⅢ期新段階のものとみられる猿投窯系須恵器杯身が、甘樫丘東麓遺跡で

乙巳の変（645年）に伴うと目される焼土層から出土していること（次山1995）とも矛盾しない。

「山茶碗」については、高台畳付の靱殻痕跡の有無など、その形質に若干のばらつきが認められるものの、基本的に同一窯での焼成品と考える範囲にとどまっており、全体の様相は八事裏山1号窯跡群（名古屋市天白区）のE窯床面直上出土品と高い類似性を示す。E窯の操業停止後に同窯の窯体上に形成された灰層からは、鳥羽離宮（京都市伏見区）の東殿地区に供給されたものと同範の軒丸・軒平瓦が少なからず出土しており（尾野1992）、鳥羽離宮東殿地区での建物造営に関する文献上の記録は1137～1155年に集中することが知られている（上原1978）。したがって、12世紀半ばと考えられる瓦生産に先行するE窯とほぼ同時期と目されるH-G-28号窯については、12世紀前半でも第1四半期を中心とする年代が考えられてよいだろう。

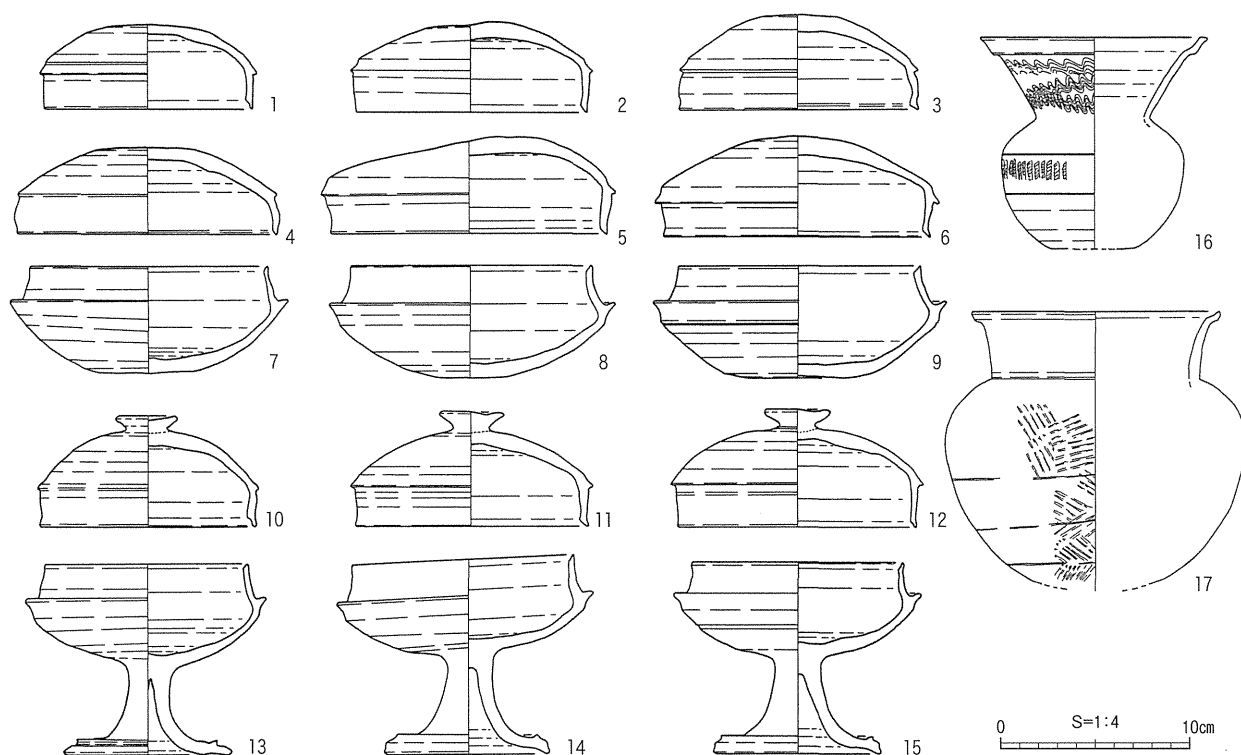
4基の窯跡の操業時期（編年的位置）については、概ね以上のように考えられたわけだが、具体的な暦年代観を提示できていないH-39号窯とH-61号窯について最後に再度論及し、本稿のまとめに代えることとしたい。

かつて筆者は、H-61号窯出土杯蓋の口径の検討を通して、この窯を陶邑窯TK10型式並行とする考え方を示したことがある（尾野1993）。この筆者の見解に対しては、杯蓋の口径のみを根拠としていることについて厳しい批判（伊藤・岩本2004）を頂戴しているが、その後改めて次の2点を挙げて、H-61号窯はやはり陶邑窯TK10型式並行と見なされることを論じておいた（尾野2009）。即ち、H-61号窯に先行する筆者編年案Ⅱ期新段階には、陶邑窯MT15型式以降の特徴である蓋杯の大型化が始まっていることと、同じくTK10型式以降の特徴とされる高杯の二段スカシ窓が、H-61号窯の時期には既に出現していると考えられることの2点である。

もっとも、これまで筆者がⅡ期新段階の具体的事例として挙げてきたH-10号窯出土品は、地表面で採集された遺物でしかなかったから、この段階における小型蓋杯と大型蓋杯の同時共存を説明するには必ずしも充分でない側面があった。それゆえ、これまでは消費遺跡である高蔵遺跡（名古屋市熱田区）第4次調査SD06出土品（第20図）などを用いて、小型蓋杯と大型蓋杯の共存を説明してきたのだが（尾野1998）、窯跡出土品ではなかった点に、論拠としての弱さがあったことは否めない。しかし、今回4トレンチの下層灰層で両者が共伴することが確認されたわけであり、これによってⅡ期新段階という段階設定と共に、この段階を陶邑窯MT15型式並行と考えることの妥当性が検証されたと言えるだろう。

また、H-61号窯を含むⅢ期古段階を陶邑窯TK10型式並行と見なす根拠としての二段スカシ窓をもつ高杯の出現についても、肝心のH-61号窯から出土がない上に、例示したH-18号窯出土品が地表面採集資料だったために、推測としてしか語れなかった。しかし、やはり4トレンチの上層灰層でⅢ期古段階の須恵器群に伴うことが今回確認されたから（第14図137・138）、この点についても具体的な資料に即しての説明が可能となった。

したがって、H-61号窯そのものはもちろんのこと、やはりⅢ期古段階は陶邑窯TK10型式並行で、これに先行するH-39号窯の時期、即ちⅡ期新段階こそが陶邑窯MT15型式並行と見なされるべきではないかと思われる。あるいは、こうした筆者の見解に対しては、先にⅢ期中～新段



第20図 高蔵遺跡第4次調査S D06出土須恵器実測図 (S=1:4)

階の過渡的様相と位置付けた須恵器（推定H-61B号窯焼成品）の混在を指摘し、二段スカシ窓をもつ高杯をこの一群に伴うものとすべきという異見があるかもしれない。しかし、H-61B号窯の生産にかかると推定される他の須恵器は、基本的に2トレンチの灰層や4トレンチの上層灰層以下の層からは全く出土していない。したがって、4トレンチの上層灰層から出土した137・138を混入だとするならば、高杯脚部のみが偶然に二点も混入したという、極めて不自然な説明をしなければならなくなる。やはり、137・138はH-61号窯の焼成にかかる須恵器と見なされてしかるべきだろう。

H-39号窯・H-61号窯の陶邑窯との並行関係については、およそ以上のように考えることができるが、H-39号窯の属するⅡ期新段階が陶邑窯MT15型式並行であることは、暦年代観との関連上注意を要する。なぜなら、「辛亥年」銘鉄剣で著名な稲荷山古墳（埼玉県行田市）の造出し脇から出土した須恵器の有蓋脚付短頸壺（第21図）が、まさにこの段階の猿投窯系須恵器そのものと考えられるからに他ならない（尾野1998）^(註1)。

これまで、伝稲荷山古墳出土も含めて同古墳出土の須恵器は、基本的にTK23型式ないしTK47型式並行と見なされてきており、MT15型式以降のものとされる三鈴付杏葉など、礫郭出土品との年代観の乖離が問題とされてきた（白石1985）。しかし、猿投窯系の有蓋脚付短頸壺の存在は、稲荷山古墳出土の須恵器がMT15型式並行と考えられることと共に、指摘されていた年代観の齟齬が解消される可能性を示すものである。

確かに、稲荷山古墳出土須恵器を概観してみると、全体的な雰囲気はMT15号窯出土品よりも、TK23号窯やTK47号窯出土品と似ているように見受けられる。しかし、MT15型式並行と考

られた推定H-39号窯焼成品も、少数含まれている大型の蓋杯を除いた雰囲気では論ずるならば、TK23型式あるいはTK47型式並行と見なされかねない特徴をもっている。これは、MT15型式に時期的に並行する土器群であっても、たまたま大型の蓋杯を欠いている場合には、先行型式とされるTK23型式もしくはTK47型式並行と誤認されるおそれがあることを示すものである。

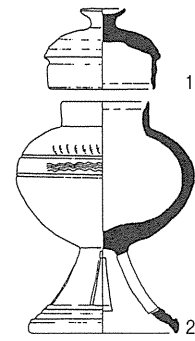
鉄剣や伝稲荷山古墳出土須恵器と厳密な意味での共伴関係にはない以上、今このささやかな結論から、短兵急に鉄剣銘の「辛亥年」が西暦471年なのか531年なのかを論ずることは控えておこう。ただ、全国的な斉一性が論ぜられることの多い古墳時代の須恵器についても、上述のように地域色を認める立場から改めて検討を行えば、これまでとは異なる認識の得られる可能性があることをここでは指摘しておきたい。

さらに付言しておくならば、筆者がⅡ期新段階において想定しているような大型蓋杯と小型蓋杯の共存関係は、ごく限られた地域（例えば猿投窯あるいは東海地方）の特色という枠には納まらないかもしれないことにも留意しておく必要があるだろう。なぜなら、これまで多くの須恵器研究者が参照してきた田辺昭三氏や中村浩氏らによる陶邑窯編年（田辺1966・1981、中村1978）の見直し作業が進められる中で、大型蓋杯と小型蓋杯を一定期間共存関係にあったとする考え方が、既に陶邑窯の研究の側からも提示されているからである（佐藤2007）。

大きな変化の方向性を提示したという点で、田辺氏らの編年研究は学史上尊重されるべきだし、小型蓋杯=TK47型式以前=古い、大型蓋杯=MT15型式以降=新しい、という理解も大枠としてはあながち間違いとは言えない。しかし、時間の尺度としての編年の目盛を細かくしようとするほど、個々の遺物にこうした図式的理解を当てはめるだけでは、遺跡からの出土実態を説明できなくなってしまうことが問題なのである。

考古学が基本的に〈モノ〉を扱う学問である以上、理論は出土実態をより包括的・普遍的に説明できるように構築される必要があり、既成の編年観では暦年代を15~20年で論ずる傾向にある昨今の後期古墳研究には不十分であろう。須恵器の編年でどこまで細かく年代を絞り込むことができるかの問い直しと共に、陶邑窯についての新たな編年観の構築・提示が待たれる所以である。

（註1）窯跡から同じ器形の須恵器が出土しているわけではないものの、稲荷山古墳出土の須恵器有蓋脚付短頸壺の口縁端部や脚端部の形状は、H-39号窯やH-10号窯出土品との共通性が高い。敢えて相違点を指摘するならば、H-39号窯焼成品と考えられる高杯の脚部にはスカシ窓が三方に配されているのに対して、稲荷山古墳出土例は四方であり、この点に古い要素を見いだすこともできないではない。しかし、少数ではあるものの、今次調査出土品の中にも四方にスカシ窓をもつとみられる高杯脚部片（第10図67）があることを考えれば、4基の窯の中で最も古く位置付けられるH-39号窯の時期（Ⅱ期新段階）に、四方スカシ窓が残っていた蓋然性は決して低くない。したがって、四方スカシ窓を有していることは、稲荷山古墳出土の有蓋脚付短頸壺をⅡ期新段階のものとする考えを妨げない。



第21図 稲荷山古墳出土猿投窯系須恵器有蓋脚付短頸壺（杉崎ほか2007より）
（S=1:4）

■参考文献一覧

- 伊藤禎樹・岩本佳子 2004「名古屋蝮ヶ池窯について」『三河考古』第17号 三河考古刊行会
- 岩崎直也 1987「尾張型須恵器の提唱」『信濃』第39巻第4号 信濃史学会
- 植野浩三 1998「五世紀後半から六世紀前半代における須恵器生産の拡大」『文化財学報』第十六集
奈良大学文化財学科
- 上原真人 1978「古代末期における瓦生産体制の変革」『古代研究』13・14 元興寺文化財研究所考古
学研究室
- 尾野善裕 1992「八事裏山1号窯跡群の基礎的再検討」『古代人』第53号 名古屋考古学会
- 尾野善裕 1993「猿投窯6世紀の空白をめぐる」『考古学フォーラム』3 考古学フォーラム
- 尾野善裕 1997「尾張・西三河（窯跡）猿投・尾北・その他」『古代の土器5-1 7世紀の土器（近
畿東部・東海編）』古代の土器研究会
- 尾野善裕 1998「中・後期古墳時代暦年代観の再検討」『第6回東海考古学フォーラム「土器・墓が語
る美濃の独自性～弥生から古墳へ～」』東海考古学フォーラム岐阜大会実行委員会
- 尾野善裕 2000「猿投窯（系）須恵器編年の再構築」『第1回東海土器研究会 須恵器生産の出現から
消滅—猿投窯・湖西窯編年の再構築—』東海土器研究会
- 尾野善裕 2009「上向イ田窯出土の須恵器をめぐる」『上向イ田窯（豊田市埋蔵文化財発掘調査報告
書 第38集）』豊田市教育委員会
- 北野博司 2001「須恵器の風船技法」『北陸古代土器研究』第9号 北陸古代土器研究会
- 木村有作 1990「須恵器・土師器について」『守山区小幡 茶臼山古墳発掘調査報告書』名古屋市教育
委員会
- 古代の土器研究会 1998「討論会；7世紀の土器をめぐる」『古代の土器5-2 7世紀の土器（近
畿西部編）』付録 古代の土器研究会
- 斎藤孝正 1986「東山61号窯出土の須恵器」『名古屋大学総合研究資料館報告』第2号 名古屋大学総
合研究資料館
- 斎藤孝正 1989「古墳時代の猿投窯」『第6回東海埋蔵文化財研究会 断夫山古墳とその時代』愛知
考古学談話会
- 斎藤孝正 1995「東海西部（愛知・岐阜）」『須恵器集成図録 第3巻 東日本編I』雄山閣出版
- 佐藤 隆 2007「6世紀における須恵器大型化の諸様相—陶器窯跡編年の再構築に向けて—その3—」『大
阪歴史博物館 研究紀要』第6号 大阪市文化財協会
- 城ヶ谷和広ほか 1991「寺野遺跡の出土遺物について」『考古学フォーラム』2 愛知考古学談話会
- 白石太一郎 1985「年代決定論（二）弥生時代以降の年代決定」『岩波講座 日本考古学1 研究の方法』
岩波書店
- 杉崎茂樹ほか 2007『武蔵埼玉 稲荷山古墳 史跡埼玉古墳群 稲荷山古墳発掘調査・保存整備事業
報告書』埼玉県教育委員会
- 田辺昭三 1966『陶器窯址群I』平安学園研究論集第10号 平安学園考古学クラブ
- 田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店
- 次山 淳 1995「第75-2次調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』25 奈良国立文化財研究所
- 中村 浩 1978「和泉陶器窯出土遺物の時期編年」『陶器Ⅲ』大阪府教育委員会

- 西口寿生 1993「飛鳥・藤原地域出土の土器」『古代の土器研究会第2回シンポジウム 古代の土器研究—律令的土器様式の西・東2 須恵器—』 古代の土器研究会
- 花谷 浩 1992「飛鳥池遺跡の調査（飛鳥寺1991-1次調査）」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』22 奈良国立文化財研究所
- 宮 昌之 1998「稲荷山古墳出土の須恵器—平成9年度発掘資料—」『調査研究報告』第11号 埼玉県さきたま資料館
- 森泰通ほか 2009『上向イ田窯（豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書 第38集）』 豊田市教育委員会

付編 東山114号窯出土木炭の炭素14年代測定

はじめに

東山114号窯は名古屋市千種区仁座町（名古屋大学東山キャンパス）に所在する窯跡であり、2003年に野依記念学術交流館の新設工事に伴って発見され、名古屋大学文学研究科考古学研究室により緊急調査が実施された（尾野ほか2006）。調査では、灰層や土坑および、煙道部とみられる窯体の一部が検出された。遺物は無釉の陶器類や窯道具などで、大半が灰層より出土した。

この灰層から出土した木炭（炭化材）を試料に、自然科学的年代法によって考古学的な年代を検証することを目的とし、加速器質量分析法による炭素14年代測定を実施した。

1 試料と方法

灰層出土木炭は燃料材が炭化したもので、岡田賢氏が樹種同定を行っており、コナラ・クヌギ・針葉樹の3種類を確認している。樹種同定が実施されたものの中からコナラ、クヌギ、針葉樹各3点を選び出し、合計9点の木炭を試料とした。採取時には木炭が出土した地区と層位を記録していたが、それを紛失してしまったため試料の詳細は不明となっている。

前処理は名古屋大学文学研究科大学院生の菅野裕之氏が行い、タンデトロン加速器質量分析計による測定は名古屋大学年代測定総合研究センターに依頼した。

2 結果

表1は測定された炭素14年代および較正年代である。OxCal4.0を用い、IntCal04の較正曲線を使用して炭素14年代の暦年代較正を行った。その結果を年代の古いものから順に並べたものが図1である。

3 考察

分析の結果、炭素14年代と較正年代は大きく2時期に分かれる。一つは試料番号02・08・06で、較正年代は894calAD～1029calADである。その他の試料は988calAD～1176calAD年という較正年代を得た。後者の年代は、出土遺物の考古学的な年代としての諸説である百代寺窯式の古相（1060～1080年頃）、もしくは山茶碗第3型式（11世紀末～12世紀前葉）のいずれにも矛盾しない。しかしながら、前者の較正年代は予想しなかったものであり、こうした年代がでた要因を究明することが今後の課題である。

（三岡・山本）

引用文献

尾野善裕ほか 2006『東山114号窯発掘調査報告書』名古屋大学大学院文学研究科考古学研究室

表1 東山114号窯出土木炭の炭素14年代測定結果

試料番号	試料材料	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	^{14}C age (BP)	error ($\pm 1\sigma$)	Lab. Code No. (NUTA2-)	較正年代 (cal AD)	
						$\pm 1\sigma$	$\pm 2\sigma$
H114-01	木炭	-27.3	979	23	13613	1019-1045 (40.8%) 1096-1120 (22.1%) 1141-1148 (5.2%)	1014-1054 (48.6%) 1079-1154 (46.8%)
H114-02	木炭	-22.8	1085	30	13614	898-920 (22.0%) 945-993 (46.2%)	894-1016 (95.4%)
H114-03	木炭	-26.5	1002	20	13615	997-1006 (10.4%) 1012-1034 (57.8%)	988-1044 (89.1%) 1100-1119 (5.4%) 1143-1147 (0.9%)
H114-04	木炭	-29.7	939	21	13617	1037-1051 (12.6%) 1081-1127 (40.9%) 1135-11152 (14.7%)	1031-1155 (95.4%)
H114-05	木炭	-26.6	958	21	13598	1027-1047 (24.0%) 1090-1121 (34.7%) 1140-1149 (9.5%)	1021-1059 (31.2%) 1066-1155 (64.2%)
H114-06	木炭	-31.4	1037	24	13636	990-1019 (68.2%)	904-913 (2.0%) 971-1029 (93.4%)
H114-07	木炭	-23.9	967	25	13669	1023-1046 (29.9%) 1093-1121 (30.3%) 1140-1148 (8.0%)	1017-1060 (36.1%) 1065-1155 (59.3%)
H114-08	木炭	-26.7	1056	25	13670	977-1018 (68.2%)	898-920 (11.0%) 948-1024 (84.4%)
H114-09	木炭	-24.6	914	22	13671	1046-1093 (42.1%) 1121-1140 (16.5%) 1148-1160 (9.7%)	1034-1176 (95.4%)

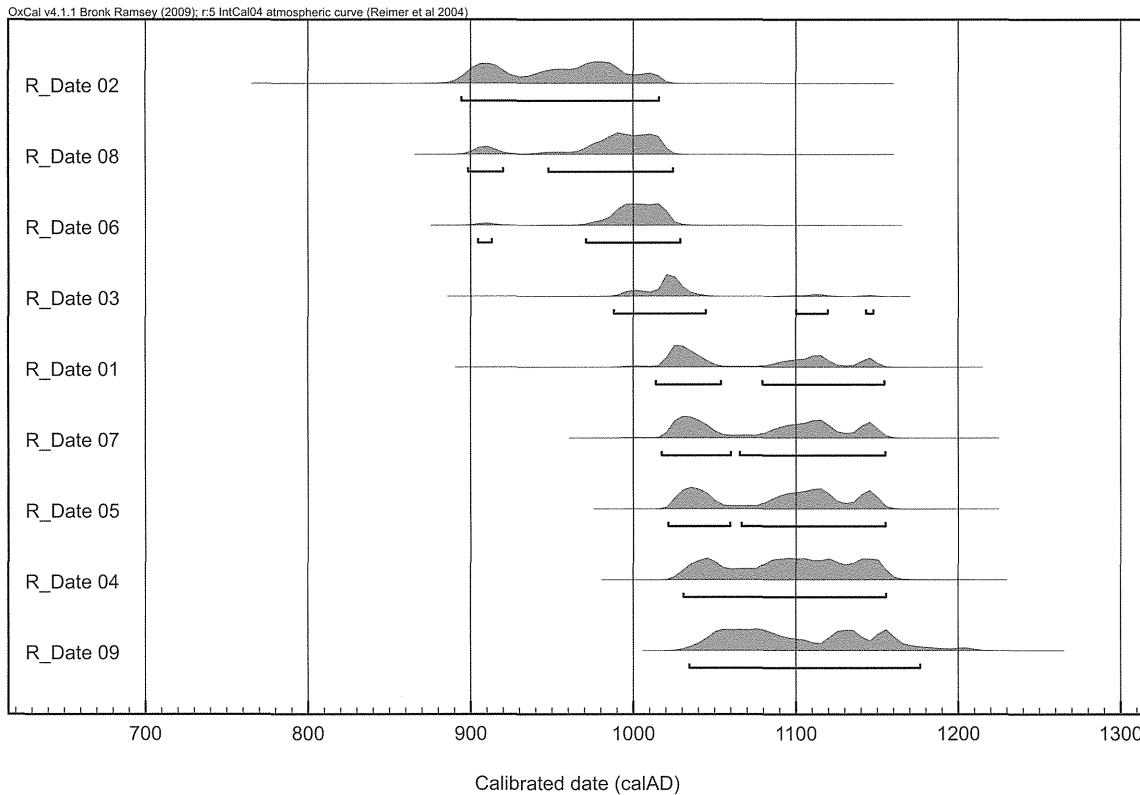


図1 東山114号窯出土木炭の較正年代

報告書抄録

ふりがな	ひがしやま61ごうようはくつちようさほうこくしょ
書名	東山61号窯発掘調査報告書
副書名	
巻名	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	尾野善裕 梶原義実 三岡由佳 山本直人
発行機関	名古屋大学大学院文学研究科考古学研究室
所在地	名古屋市千種区不老町
発行年月日	西暦2010年3月31日
ふりがな	ひがしやま61ごうよう
所収遺跡	東山61号窯
ふりがな	なごやし ちくさく そのやまちょう さんちょうめ
所在地	名古屋市千種区園山町三丁目
コード市町村	23101
遺跡番号	5-75
北緯	35度 9分10秒 (日本測地系)
東経	136度58分18秒 (日本測地系)
調査期間	2005年11月10日～2005年12月12日
調査面積	約130㎡
調査原因	遺跡範囲確認
種別	窯跡
主な時代	古墳時代
主な遺構	灰原
主な遺物	須恵器・埴輪
特記事項	猿投窯編年東山61号窯式の標式窯。下層から先行する東山39号窯のものとみられる灰層を検出。

写 真 图 版



1 調査地全景（南より）



2 東区伐開後状況



1 1トレンチ完掘状況（西より）



2 2トレンチ完掘状況（南より）



1 3トレンチ完掘状況（南より）



2 3トレンチ灰層堆積状況



1 4トレンチ灰層上面（西より）



2 4トレンチ完掘遠景（南より）



1 4トレンチ西端部灰層断面



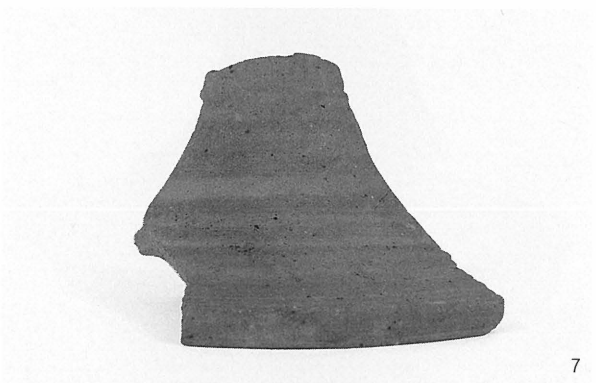
2 4トレンチ中央部灰層断面

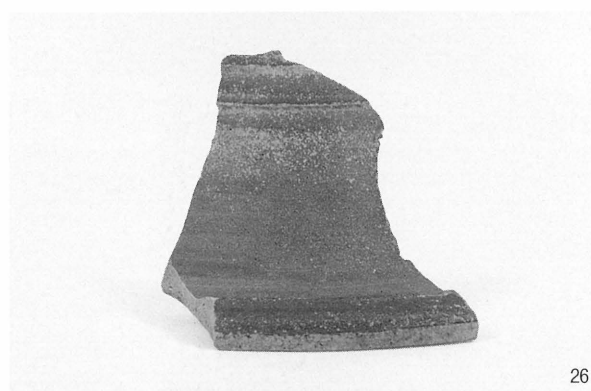
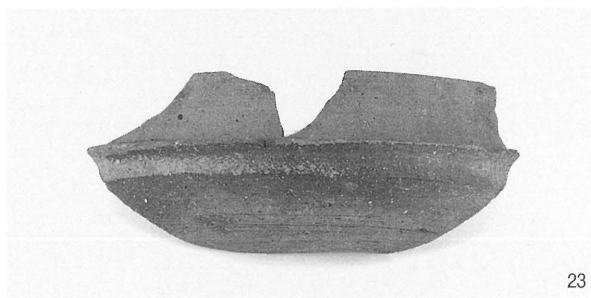


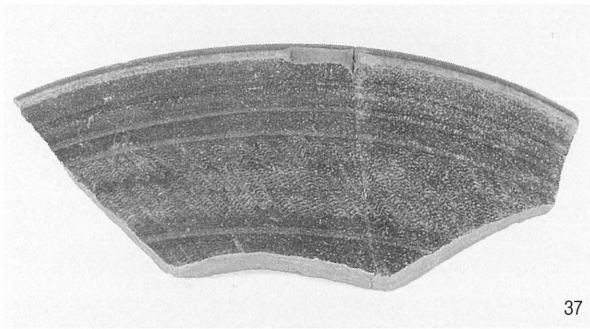
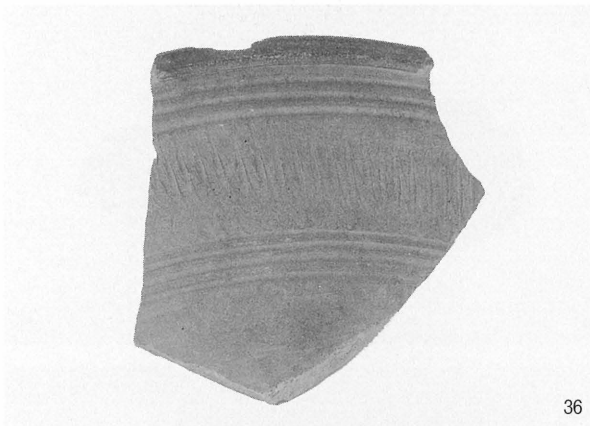
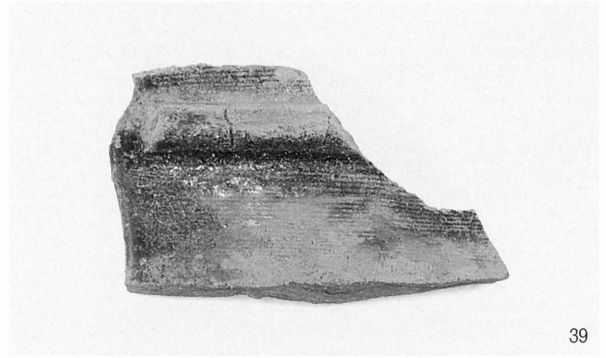
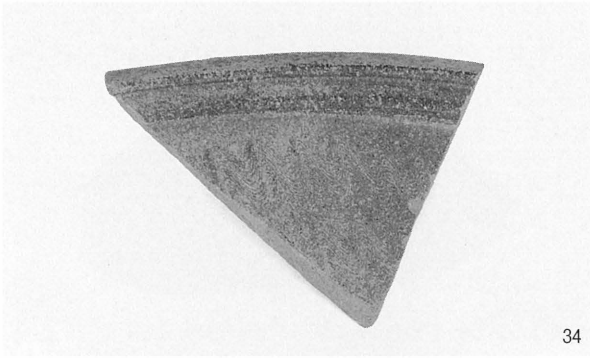
1 4トレンチ灰層南端



2 東区完掘状況（南より）











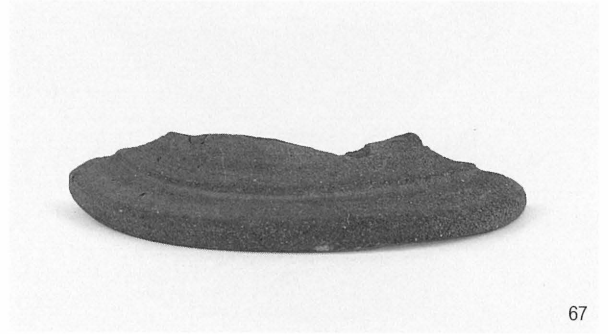
59



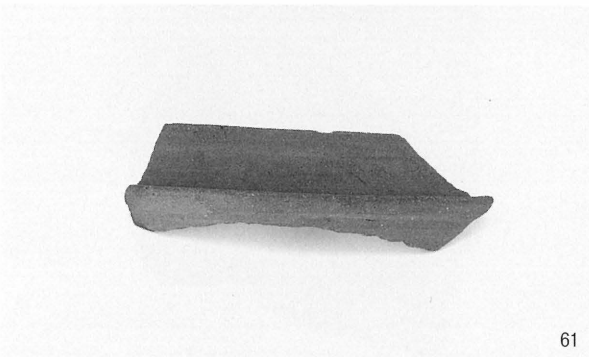
65



60



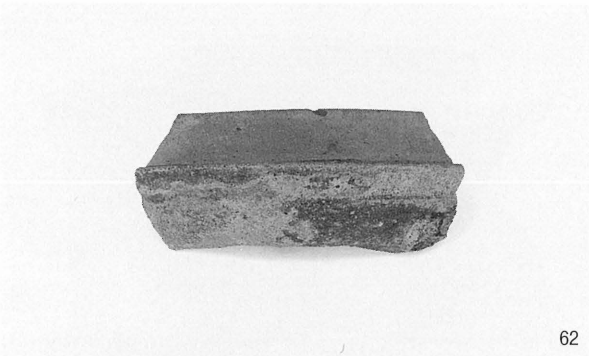
67



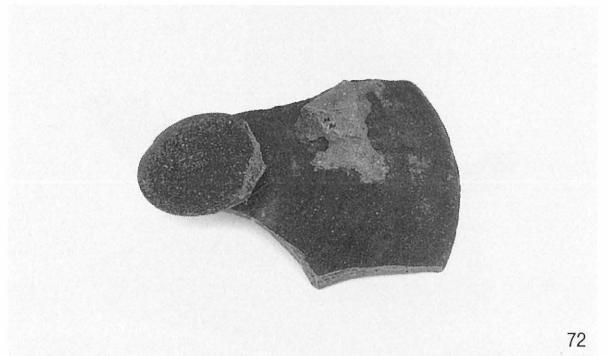
61



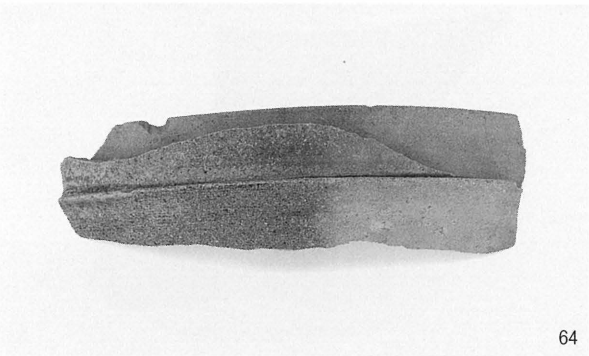
70



62



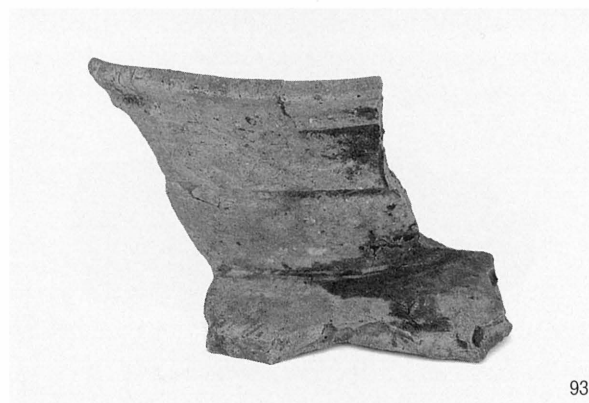
72



64



73





95



101



96



102



97



103



98



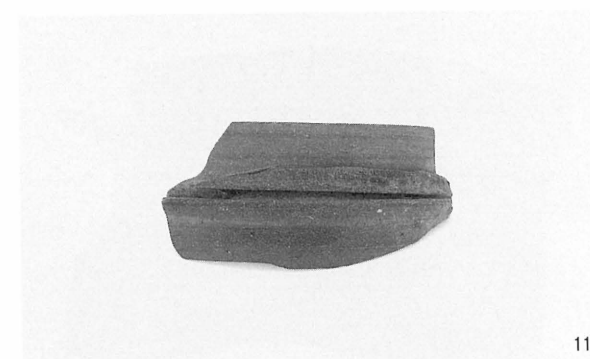
104

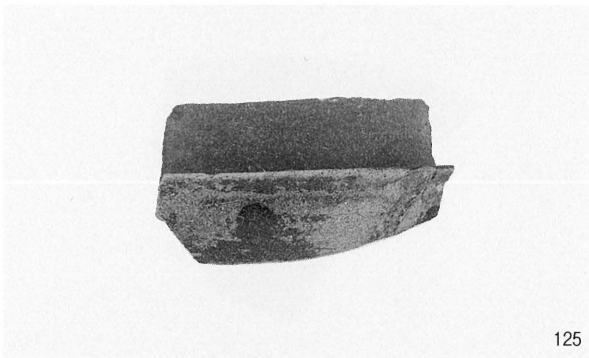
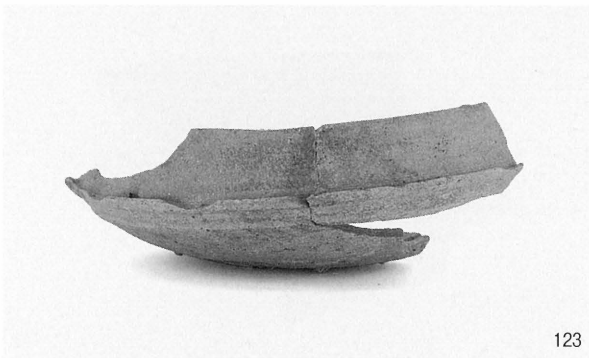
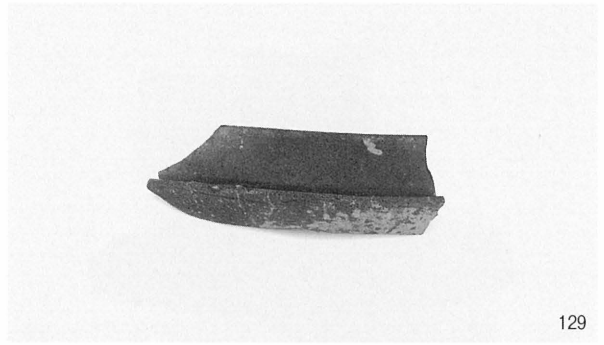
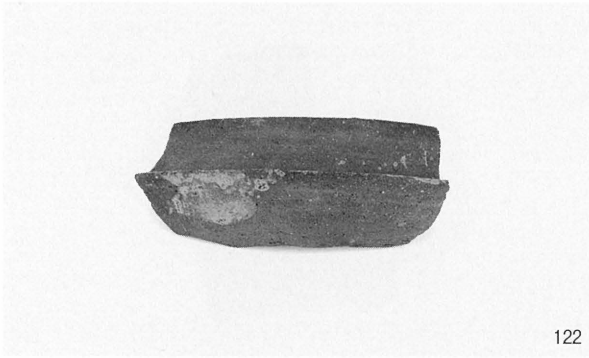


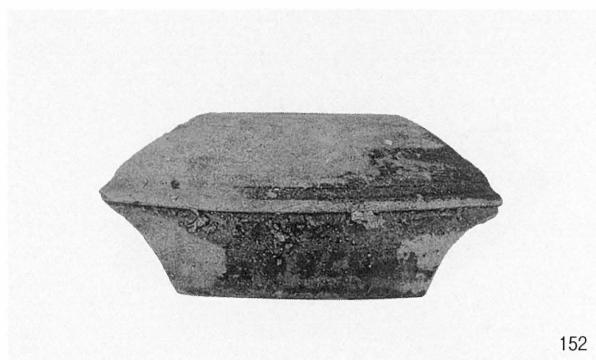
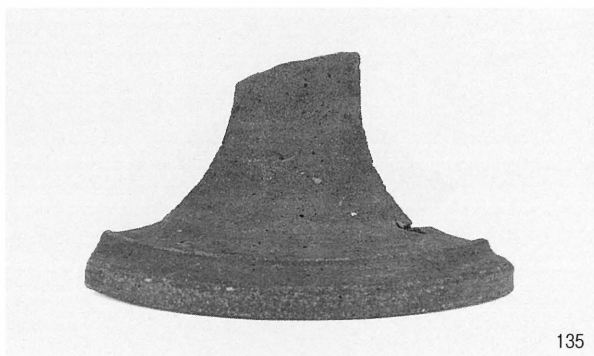
99

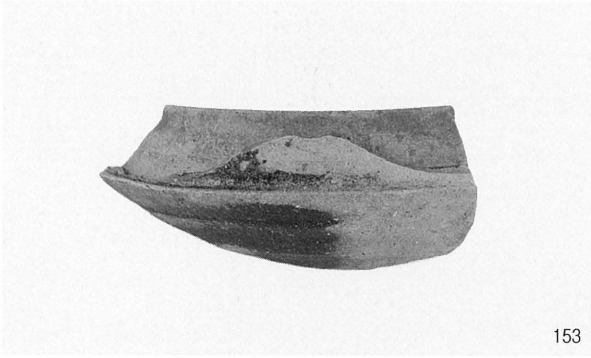


106





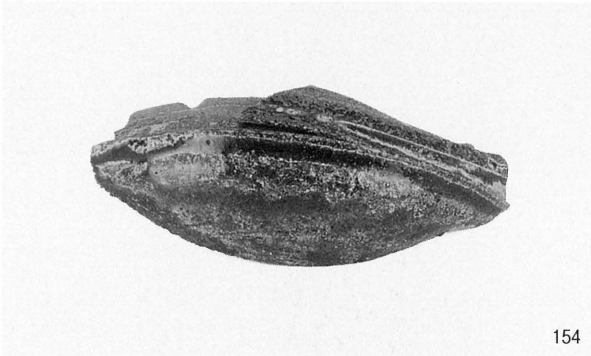




153



167



154



170



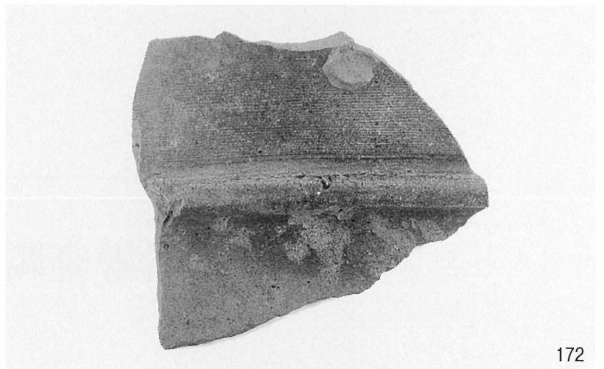
158



171



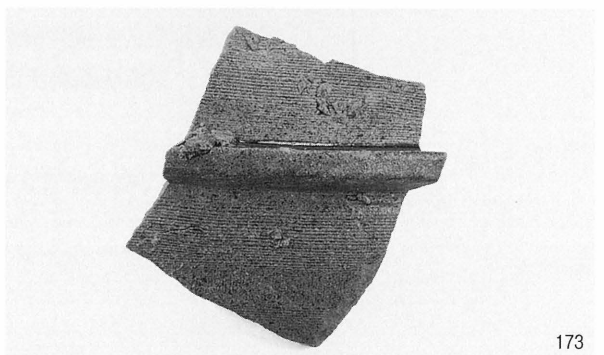
165



172



166



173

東山61号窯発掘調査報告書

発行日 2010年3月31日

発行 名古屋大学大学院文学研究科考古学研究室
〒464-0814 名古屋市千種区不老町

印刷 (有)真陽社
〒600-8475 京都市下京区油小路仏光寺上ル